海外婦人労働資料第32号

婦人の職業

—アメリカ婦人の進出と成長—

労働省婦人少年局

はしがき

これは米国において、経済的、社会的変化が婦人の職業にどんな影響を与えたか、又そのような変化の中で婦人が如何に進出して来たかを、特に南北戦争直後の一八七〇年以来、十年毎に行われている国勢調査の報告にもとずいて描き出したものです。

原書は米国労働省婦人局一九四九年六月発行の Women's Jobs—Advance and Growth—(Bulletin of the Women's Bureau No. 232) で、婦人局局員ジャネット・フックス女史の著「婦人の職業七〇年史」Women's Occupations Through Seven Decades の普及版として、同局が職業を選ぼうとする若い女性のため、或は高等学校の先生や団体の指導者のために編纂しなおしたものです。

日本の私達にとつても示唆に富んだ読物と思われますので、若い方々、指導者の方々に何らかの御参考となることを願つて訳出いたしました。

一九五一年一〇月

翻訳許可番号
〇七三・〇二一四〇三〇

労働省婦人少年局

目次

第一章　婦人の職業の變遷……三
婦人の職業に變化を齎した經濟上の變化……三
習慣と生活水準の變化……七
家族生活の變化……九
職業婦人に對する世間の態度の變化……一一
戰爭の影響……一三
移民の影響……一五
女子教育の變化……一六
人口上の變化……一九

第二章　事務的職業への進出……二一
事務員……二二
簿記係、会計係、出納係……二六
電話交換手、電信員……二七
病院及び歯科医の助手……二九
出張員、集金人……三一
給仕、使送係……三三
郵便配達人……三五
販売員……三三
行商人……三六
保険の代理人及びブローカー……三六
不動産の販売人及び管理人……三七
新聞配達人……三八

第三章　工業労働に従事する婦人……三九
食料品製造工……四〇
かんづめ工……四三
製菓工……四三
食肉加工工……四五
製パン、焼菓子工……四五
酪農製品工……四六
穀製品、その他の食品加工工……四七
飲料品製造工……四七
煙草製造工……四八
繊維製品製造工……四九
綿紡織工……五〇
編製品工……五二
毛紡織工……五三

絹人絹紡織工……五五
敷物製造工……五五
染色工、仕上工……五六
被服製造工……五七
裝飾品製造工……五八
婦人子供服製造工……五九
男子服製造工……五九
帽子製造工……六〇
木製品製造工……六〇
製紙工……六二
印刷製本工……六三
化学薬品製造工……六四
ゴム製品製造工……六五
製靴工……六七
製皮工……六八
硝子工……六八
陶器工……七〇
建築用土石品製造工……七二
電気機械器具製造工……七三
果物、野菜の分類工、荷造工……七四

第四章　サービス業に従事する婦人……七六

家事サービス従業者……七七
洗濯業従業者……七九
美容師、理髪師、美爪師……八〇
派出婦、助産婦……八二
エレベーター係……八三
掃除人……八三
娯楽、厚生施設従業者……八四

下宿、貸間業者……八五

第五章　専門的職業に従事する婦人……八七

教師……八八
高級看護婦……九一
社会事業、福祉事業、宗教事業の従業者……九三
音楽家、音楽教師……九四
美術家、美術教師……九五
芸能人、スポーツ家及び関連従業者……九五
著述家……九六
図書館員……九七
図書館補助員……九八
編輯記者、探訪記者……九九
学問的職業従事者……九九

医師……一〇〇
歯科医……一〇一
牧師……一〇一
弁護士……一〇二
科学及び工業に従事する専門家……一〇三
デザイナー、図案家……一〇四
実験技術者……一〇五
化学、分析、冶金の専門家……一〇五
技師……一〇六
建築家……一〇七
獣医……一〇八
その他の専門的職業に従事する婦人……一〇九
写真師……一〇九
葬儀監督者、死体防腐師……一〇九
飛行家……一一〇

第六章　事業を営む婦人……一二一
食料品店経営者……一二二
食堂、喫茶店経営者……一二三
専門店経営者……一二三
雑貨、洋品、靴、帽子店経営者……一二四
鉱工業経営者……一二五
ホテル経営者……一二六
官公吏、監督官……一二六
郵便局長……一二七
薬屋、薬剤師……一二七
銀行、金融業者……一二九
団体の役員……一三〇
保険業者……一三一
第七章　農業に従事する婦人……一三三
第八章　職人……一三七
職長、監督……一三八
装飾師……一三九
塗装師……一三九
表具師……一四〇
家具建装師……一四〇
第九章　保安サービスに従事する婦人……一四三
第十章　あとがき……一四四

まえがき

あなた方の中まだ就職していらつしやらない方でも、多分二、三年の中には希望の職業をお選びになる時が来ると思います。なぜなら近頃では若い女子も男子と同様、少くとも結婚までは働くのが普通になつているからです。中には結婚後も子供が生れるまで働く人もありますし、いろいろの理由のために、子供を育てながら、或は子供が成人してから後に働く人々もあります。ともかく一生の中のどの時期かに職業を持たない婦人は今のアメリカは少いようです。

もしあなたが一八三六年に生きていらしたとしたら、当時アメリカを訪問したイギリスのハリエット・マティノーが云つたように「工業がひらける前だつたら教師、仕立人、下宿かホテルの経営者の三つの職種の中から、あなたは御自分の職業を選ぶほかなかつたでしようが、今では製造工業に婦人が進出しています。印刷工場でも職工、かがり工のみならず植字工として女子が雇われるようになりました」という世の中に、お会いになつたでしよう。マティノーは又別の土地で家事労働や製靴業に従事する婦人についても話しています。（その他の職種についている女子もあることはありましたが、数は多くありませんでした。）

今日ではハリエット・マティノーの大ざつぱなリストからでなく、四五一種の職業中の四四二種類

の中から好きな職種を選ぶことができます。

もしあなたが、なぜそのような変化が起つたか、それはどんな職種か、そして多くの婦人はどんな職種を好むかというようなことに興味をお持ちならば、この本を読んで下さい。この本は大部分合衆国国勢調査局の報告書をもとにして書いたものです。この種の報告書は、見かけは恐ろしく退屈ですが、一度とつついてしまえば、私達自身について案外面白い物語りをしてくれるものです。「私達」はそれ自体一つの記録です。私達の生涯に起る重大な出来事――誕生、教育、住所、結婚、子供、職業等――がみなその中に記されいます。

ここに書いてあるお話は、この国のごく初期の頃から始まつています。けれども或程度詳細にわたつて扱つたのは南北戦争直後の一八七〇年からになつています。なぜならこの年に始めて国勢調査局が働く婦人を男子から分けて数えるようになつたからです。そしてお話は最も新しい国勢調査の行われた一九四〇年で一応終つています。一九五〇年の調査の結果が出ましたら、又報告をつづけましよう。その報告の中にあなたは何として出ていらつしやるでしよう。学生でしようか。秘書でしようか。それとも工場で働く婦人、家庭の主婦、農業家、販売員、電話交換手のどれかでしようか。

ともかくこの本で、婦人のして来た仕事、現在している仕事についてあなたにお話することが、やがてあなたが御自分の職業をお選びになる時に何かの足しになるよう願つております。

第一章　婦人の職業の変遷

私達アメリカ人は機械を用いて他のどの国よりも多くの物資を生産しています。又他のどの国よりも多くの物を売買しています。私達の交通組織は世界中で一番大きく複雑です。そして物や仕事や労力を売買することによつて、他のどの国よりもお金を有効に使つています。私達は世界で最も工業化された国民であります。

婦人の職業に変化を齎した経済上の変化

もしこの国の初期の時代に生きていたら、私達は農業経済の下に生活していたでありましよう。私達の大部分は農村に住み、農業に関する仕事をしていたでしよう。必要品は大方家族の者が栽培し、家庭で加工したでしよう。当時は道具も、荷馬車も、鋤も、布も、衣類も、靴も、家具も、寝具も、すべて家庭でつくられていました。けれども一部の必要品は他人との交換によつて得たかも知れませ

ん。交換といつてもお金とでなく、他人が求めている物や労力と替えるのです。結婚する時には、近隣の人人が来て家を建てる手伝いをしてくれますから、請負人や、大工や、左官屋にお金を払う必要はありません。私達が隣人の麦打ちを手伝うと、隣人は私達の穫入れを手伝います。家の中の女の仕事は大勢の穫入人や麦打人の食事をつくることです。女は食物をつくり、糸を紡いで布を織り、衣服をこしらえ、病人や老人の面倒をみ、子供の教育をしました。医者や看護婦はめつたにいませんでしたから、子供が生れる時には近所の人や、時には産婆が来て手伝つたのです。先生の数もごく僅かでしたし、学校に上る人の数も今よりずつと少かつたのです。

この若い国は莫大な天然資源に恵まれていました。肥沃な土地、貴重な石炭と鉄の鉱脈、広大な森林地帯、交通路や動力源となる深く広い河川、安全に碇泊できるよい港湾、そしてその上旺盛な精力と発明の才能に恵まれていました。この精力と才能は莫大な天然資源を利用して、百年も経たない中に、私達の農業経済を世界一発達した工業経済に変えてしまいました。こういう情勢の下で婦人は無数の職場に進出していたのです。

農業経済から工業経済に成長したことについては二つの大きな進歩があげられますが、そのどちらも婦人に新しい職業分野を拓いてくれました。その第一は機械の発達と、工場、鉄道、船舶の建造です。婦人の職業という見地からは、機械の中でも裁縫ミシンが一番大切です。始めは家庭でつくられ、幾分後からは洋服屋の手でつくられていた衣服は、裁縫ミシンが電動機械になつてから殆どすべて工場でつくられるようになりました。

鉄道と運河が国中をくもの巣のようにはりめぐらし、船や港が建設され、商業が繁栄するに従つて、婦人の職業分野を拓く第二の進歩がやつて来ました。タイプライター、電信、電話の発明や、郵便網の拡大による通信の発達がそれです。殊にタイプライターは婦人に適するといわれ、事務的職業に婦人のための大きな分野を拓きました。

商業と交通がひきおこしたせわしい活動に続いて、幾つもの新しい活動分野が次次に生れました。人人の旅行が頻繁になると、先ず仕事で他の町に行く人人のために、食べたり、泊つたりするレストラントやホテルが必要になります。衣服をきれいにしてくれる洗濯屋も必要です。次いで家にいる家族の者にもそういう施設の便利さが分つてきます。家庭でつくつていた食物がどんどん機械で加工され、衣類も機械でつくられるようになります。卸売商は百貨店に成長し、村や町に勃興した小売店――角の肉屋、パン屋、食料品店、洋品店、帽子屋――に、これらの食料品や衣料品を必要に応じて運びます。

次いで「販売技術」が進歩します。商人は品物を売る方法、お客の注意を引く方法、お客の購買慾をそそる方法をさまざまに工夫します。けれどもとうとうその仕事を専門家の手に委ねるようになな

り、ここに「消費者需要」の喚起を集中的に目指す近代的広告業が発達しました。

以上のような発展がみなあわさつて婦人の職業分野を拓いたのでした。

商工業は田舎では能率的に行えません。工場労働者は工場からそう遠い処に住むわけにはいきません。そしてその工場も原料の仕入地や、製品をさばく市場や、遠い市場に製品を積出す港にできるだけ近い地点になければなりません。そこで商工業が発達するにつれて、人々は農村を捨てて仕事のある土地に集り、密集して生活し、今まで何もなかつた処に町や都市を築き上げます。

都市や町に固まつて生活するということはそれだけで新しい型の仕事を生み出します。市内電車、バス、渡し船、その他ガス、電気、水道等の大きな公共施設が必要になつて来ます。銀行も必要ですし、劇場その他の娯楽場もどんどんできます。新聞や書物は日常必需品となります。そこで種種の職業が生れ、たくさんの婦人が職場に入つて行きます。

以上述べたように商工業の発は婦人と年少者に向つて二度大きく開かれました。第一回目は、まだ農業が大部分の人口を吸収していたが、既に家庭で物をつくる制度が崩れて、家庭外の工業がそれに取つてかわり、幼年期の工場生産制が成長のためにいくらでも多くの労働者を求めなければならなかつた時期です。第二回目は十九世紀の末、大量生産が景気の絶頂にあり、大企業や運輸機関が大きな産業の網の目の活動を行うために、新しい労力を要求した時期です。そしてこの時もまた婦人と年少者が重要な労力供給源となりました。国全体の経済が曲折に富んだ劇的な変化を辿るのにあわせて、個人の家庭経済も、家の中の婦人の経済も同様の変化を辿りました。

開拓期の家庭婦人は、母親も娘も、同居の縁故者も、一家のために物をつくつたり、奉仕をしたりしていましたが、そういう仕事は大きな経済的価値を持つていました。ところが紡織、貯蔵、パン焼き、製布、仕立、寝具製造、洗濯等の家庭内の仕事がだんだん商業の手で行われるようになり、家庭の外にある施設が老人や病人の世話をするようになりました。家庭で行われていた子供の教育や娯楽も家庭外で行われる方が多くなりました。

このような変化はすべて家庭における婦人の寄与がだんだん小さいものになつていつたことを意味します。又家庭が、物や労力を購うための現金収入を必要とするようになつた結果、一家の中で婦人をも含めた何人かの人が収入のために働かなければならなくなつたことを意味します。

習慣と生活水準の変化

こうして開拓期の自給自足の家庭は消滅しました。今日の人人、特に都会の人々はお金で借りた住居に住み、お金を出して衣料品やパンや加工食品や家具を買い、お金を払つて娯楽を求めます。そし

て開拓期のキャビンの粗末な造作のかわりに、心地よく、便利な近代的設備が無数に備えつけられ、私達は日日の生活の資材を自分の趣味に合せて選ぶことができるようになりました。ごく少数の富裕な人人だけでなく、私達「一般市民」の注文に応じて製品が届けられるようになりました。

今日の家庭生活の水準は、百年前、五〇年前よりもずつと高いものになつていますが、このような「生活水準」こそが現代産業の大量生産組織の基礎となつているのです。大量生産組織にはたくさんの大きな市場——即ち製品を買う人人——が必要だからです。（同時に家庭の人人の暮しむきも現金収入が多いほどいいということになつて来ます。）

以上のようなわけで商業は婦人を雇う必要を感じ、婦人は仕事を持つ必要を感ずるようになりました。今では男子ほどではないとしても、若い女子が自分の町にいい務め口がない場合には、仕事を求めて他の土地へ出て行くのがごく当り前になりました。

発明力と大量生産とは相まつて種種の、しかも莫大な数の物質的恩恵をつくり出し、今ではどんな慾望でもさまざまの方法で充すことができるようになりました。その上宣伝も手伝つて更に新しい慾望、即ち流行を追うことが始まりました。すべての日用品——何種類ものヘア、カーラーや、無数の飲物のためのさまざまのグラスから、衣服、自動車に至るまでの日用品に流行が恐ろしい勢で重要性を持つようになりました。

このような流行は職業の上にも大きく影響しました。

化粧が非難されない世の中となり、美容師のサービスが必需性を帯びてくると、そういう要求に応ずるために新しい産業が勃興しました。喫煙の習慣が蔓延したために、婦人の職場が開け、絹、人絹、そして最近はナイロンの靴下が日常に用いられるようになつたために、ますます新しい仕事がふえました。

家族生活の変化

開拓期の家族は一般に今日よりもずつと大家族でした。農村では妻や子供は資産の一部であり、経済的必要品でありました。トラクターや搾乳器ができる前の農村では、耕作する人手や、耕作者に食べさせたり、着せたりする人手が幾らでも必要だつたからです。

工業経済の初期になつても、前ほどではないが妻や息子や娘はやはり資産でした。なぜなら、この頃には家庭で物をつくるよりは買つた方が安くつくようになつて来たので、そういう物を買うお金を稼ぐため、子供や、時には妻が父親と共に工場に働きに出たからです。

今日では大低の子供は学校で時を過すようになり、成人になる前に家計を助ける子供はずつと少く

なりました。それに今のアパート住いの生活では大家族を抱えること自体が困難でもあります。

開拓期の娘達は、今日の私達から見ると非常に若くて結婚しました。当時の物語など読むと二〇才の未婚の女がオールドミス扱いにされている例はざらです。今日アメリカでは、女子は二一才から二二才の間に結婚する人が一番多く、夫の方は平均妻より三才未満年上のようです。二〇組の夫婦の中、子供のないのは平均約三組で、三人子供があるのが最も普通です。最初の子供はふつう結婚後一年目に生れ、母親が二八才の時に最後の子供を生み終ります。末子が一八才に達した時に母親は四五才になつています。母親が五〇才から五三才の頃に子供達は結婚して家を離れ、家は再び夫と妻の二人になります。

就学前の子供を持つ母親でも、特に学令期の大きな子供がいて母親の留守中小さい子供の面倒を見られる場合などには、外に出て働く人がおります。子供がすべて学令期に達してから働く母親の数は更に多く、子供が一八才以上になつてから働く母親の数は更に多くなつています。

習慣や生活程度の変化のために、家族の人人は家庭の外――遊園地、学校、職場、青年のクラブ、老人のクラブ、市民活動、映画、劇場――で時間を過すことが多くなりました。家族はお互い同志依存しあう程度が薄くなり、地域社会により多く依存するようになりました。*

*一九四八年四月現在、雇用者として働く母親の数は四百万人ですが、その中三百万人は夫と共に生活し、百万人が夫と別居、死別、又は離婚しています。子供が全部学令に達しない（六才未満）母親の数は八〇万、学令期の子供（六～一八才）と就学前の子供との両方を抱えている母親の数は約七五万です。

職業婦人に対する世間の態度の変化

流行の変化は目まぐるしく速かですが、社会の変化はずつと緩慢です。産業が労力を求めても、家庭が収入の増加を求めても、世の中の人人は婦人が外に出て働くことをなかなか認めませんでした。「女性の持ち場は家庭」であつてその他の何処でもないという観念は今日でもしばしば見受けます。けれどもそういう考えは、経済がますます貨幣経済の度を強めて行くために、その圧力を受けて衰えつつあります。

ひとたび社会的変化が起るとなると、新しい発展は古い土台の上に築かれるもののようです。工場と企業とが家庭の仕事を引継いだ時、婦人が今迄家族のためにして来た仕事を新しい職場で続けたのは自然でもありましたし、それだけに受けもよかつたのでした。アメリカでは農業経済の下でも、工業経済の下でも、布や衣類の製造、食物の調理、病人の看護、子供の教育等は婦人の仕事です。ただ

そういう仕事が二つの時期には全く違つた環境で、非常に異る方法によつて行われているのです。

こうした一般の態度は時に結晶して、法律や政府の政策の中に取入れられ、それらの法律や政策が婦人の雇用機会を拡大しました。例えば法律によつて義務教育を実施した時、たくさんの先生が必要になつたり公衆衛生計画を立てた時、看護婦がもつと必要になつたり、福祉計画を立てた時、ソーシャルワーカーや、事務員や、速記者の職場が開けたりしたことなどその例です。

けれども一方には、一部の世間の人や使用者の側に、ある種の仕事は女子に不適当だという観念があつて、婦人の雇用機会を狭めていました。例えば、女子がそれだけの資格を持つていても、公共の問題を扱う仕事や、旅行を必要とする仕事や、男子従業員を監督する仕事には男子の方が適していると考える人がいるのです。殊に既婚の婦人に対しては、今なお残存する「女性の持ち場は家庭である」という観念のため、又既婚婦人やその家庭が直面している経済問題を理解できないための偏見が非常に強いようです。

仕事によつては、例えば印刷や大工のように、今その分野で働いている人人が新しい人が職につくのを制限するような条件を設けている場合があります。そういう仕事では、働く人が一人前の職人と認められて一人前の給料を支払われる迄に長い間徒弟奉公をしなければなりません。その上一人前になつた職人が使用者と一しよになつて、徒弟が職人になる数を制限しようとします。そんな制限がなかつたなら、こういう分野に進出する婦人の数はもつともつとふえるでしよう。

婦人は各種の技術的手工業からは除外されています。そういう仕事は普通の婦人が持つているよりも大きな肉体的労力を必要とするからです。けれども種種の発明がそういう肉体的労働を軽減しましたので、婦人もそれらの仕事ができるようになり、雇われるようになりました。

専門的職業には婦人の雇用を阻むような、肉体労働に伴う障害はありません。この分野では男子も女子も、長い年月とお金のかかる教育と、一人前になるまで困難とを通りぬけなければなりません。けれども一般社会の態度、殊に専門的職業についている男子の態度は今迄殆ど完全に婦人をこの分野からしめ出し、近年に至つてもごく少数の婦人の進出しか許しませんでした。

戦争の影響

習慣や伝統を非常に速かに変えてしまうものが一つあります。それは戦争です。男子は戦場へ送られてしまうので、軍需品や生活品をつくる産業が労力の不足を来たし、婦人が男子にかわつて今迄不向きと考えられていた仕事に従事します。平和が回復すると、又元の習慣や伝統に帰えろうとする傾向が出て来ますが、すつかり元通りになるというわけには行きません。婦人の従事する職種は必ず拡

大されています。

南北戦争の時には、男子にかわつて婦人が学校で教鞭をとるようになりました。看護に従事した婦人もたくさんありました。又従軍している男子の衣類等をつくるため、「裁縫部屋」に大勢の婦人が集つて仕事しました。

第一次世界大戦の結果、婦人が戦時中工場で、特に金属、機械その他の軍需工場で従事したさまざまの仕事が婦人の職種に加わりました。婦人が今迄許されていなかつた、熟練を要する仕事に出て行く機会を戦争が与えたわけです。戦争が終ると多くの婦人はこういう職場から姿を消しましたが、たくさんの工場に何人かの婦人が戦後も踏みとどまつて働きつづけました。

第一次世界大戦で、婦人が組立や検査に適性を持つていることが分りました。当時伸びつつあつた工業の中、電気機械器具製造業では仕事が婦人の素質に合つていたため、婦人は永久的な職場を確保しました。電車の運転手のような仕事からは婦人は殆ど脱落し、エレベーター運転その他の仕事には多くの婦人が残りました。

第二次世界大戦は再び婦人の職場を拡げました。必要の前には使用者もちゆうちよのいとまもなく、婦人は男子にかわつて始めて熔接工やリベット工として造船所に、或は鉄道線路上に働きました。殊に航空機工場では婦人はその真価を発揮しました。ここでは仕事によつては狭い飛行機の休内に入つて作業しなければなりませんが、そんな場合体の小さい婦人は有利でした。今はまだ、第二次大戦が婦人の雇用に与えた影響を綜合的に判断するには早すぎますが、二、三の例を指摘してみるならば、航空機工業、プラスチック工業、軍隊等に婦人が永久的な職場を得たことは確かなようです。

移民の影響

アメリカに最初に移住して来たのはイギリス人、オランダ人、スウェーデン人ですが、この人人を皮切りとしてアイルランド、ドイツ、イタリー、スカンジナビア、ポーランド、ギリシア等の各国から移民の大群がぞくぞくとアメリカに流れ込んで来ました。そして移民達は婦人の職業のすう勢に幾つかの影響を与えました。

移民の婦人達は長い間家事使用人の大きな供給源でありました。何故ならば新しく移住して来た婦人達は英語を話せないハンデキャップを持つ上、職業の教育も経験も持たなかつたため、家事使用人が最も恰好な働き口だつたわけです。後に移民の入国が制限されるようになつてから、この種の家事使用人供給源は消滅しました。それは一つには、産業が発達して英語を話せない人、未経験の人にも務まる職場が出て来たからです。

移民婦人が入つて来たため、土着の婦人労働者が新しい職業分野に出て行くこともありました。例えば綿工業の初期の頃には、ニューイングランド州の工場の労働者は殆ど土地の農村から出て来る少女達でした。ところがやがてアイルランドや仏領カナダの男女がニューイングランドに入つて来て、綿工場で働くようになつたので、土地の少女達は当時需要がふえつつあつた教師、看護婦、事務的職業の方に職場を求めるようになりました。

被服工場では移民の結果、男子労働者の占める比率が次第に大きくなりました。一八八〇年の移民で英語を話せない人人がたくさん入つて来ましたが、彼等は英語が話せないために、先にアメリカへ移住して来た自分の家族や友達が既に働いている職場へ集る傾向がありました。そんなわけで使用者や周旋人が一家族グループの働き手全体に対して家長と雇用契約を結ぶのがならわしになりました。その場合の労働条件に極めて劣悪なものでした。

一八九〇年以後の被服工業では、労働者の過半数は常に婦人が占めていましたが、だんだん男子の占める比率が多くなりました。一九三〇年以後には婦人労働者の比率が再び上昇し、現在では被服工業は婦人のための最も大切な職場の一つとなつています。

女子教育の変化

変化しつつある経済下で起つた最も重要なものの一つは教育の変化です。開拓期には家庭外で教育を受ける者の数は今より少く、大学教育を受ける者の数は更に少数でした。義務教育が法律化されたことは若い女子がさまざまの職業分野に進出するのを助けました。

アメリカ婦人の教育程度は年年高くなつています。一九四〇年の女子の高等学校卒業生は一九〇〇年の一一倍ですし、大学の学位を取つた婦人の数は一九〇〇年の一〇倍です。これは決してアメリカの婦人人口が一〇倍、一一倍になつたためではありません。一九四〇年の一四才から二四才迄の婦人一の数は一九〇〇年の倍にすぎません。

アメリカでは高等学校を出る女子の数は常に男子の数を上回つていますが、大学では常に男子卒業生の方が多数です。けれども一九〇〇年には平均三人の大学卒業生中一人が女子でしたが、一九四〇年には五人の卒業生中二人が女子になつています。

高等教育は勿論婦人に専門的職業への道を拓いてくれます。けれども婦人が大学に入る機会はそうたやすく開かれず、最初は皆無と云つていい状態でした。一八三〇年以前には高等学校より上に女子の進む学校は殆どありませんでした。一八三〇年代に人人はこの事実に気附き、何とかしようと努力を始めました。一八三三年に創立されたオベーリン大学は最初から男女共学でした。婦人に高等教育を授ける多くの学校も一八三〇年代には開設されました。これらの学校は大学の資格を持つものでは

ありませんでしたが、ともかく従来より高い教育を女子に授けたのです。この種の学校としてはジョージア州マコンのウェズレイアン、マサチューセット州、サウスハドレーのマウント・ホリオーク、その他ニューヨーク州のトロイやエルミラにもありました。こういう学校は女子教育の一歩前進ではありましたが、当時彼女達の兄弟に許されていた最高教育からはまだまだ遠いものでした。

豊富な学科、十分の設備と資金、最もよい男子の大学にも匹敵する最高水準を備えた女子のための大学は、一八六五年ヴァッサー大学の創立を待つて始めて実現されました。

この試みは大成功でしたので、その後二〇年内外のうちに同じような大学がスミス、ウェルズレー、ブリンマー、ラドクリフ、バーナードとぞくぞく創立されました。

今日では一流の男子の大学に劣らぬ女子大学はたくさんあります。州立の大学でも女子を一般学生としてだけでなく、研究生や大学院生として受入れています。けれども教育の機会均等が完全に行われているとは云い難く、大学の法学部や医学部の中にはまだ女子の入学を拒んでいるものや、男子よりも限られた入学条件を課しているものもあります。ニューヨーク・タイムスによれば、ある大きな大学では未だに女子の図書館利用を制限しています。一つの図書館は戦時中はじめて女子の入館を許可しましたが、いまだに女子は閲覧室の一隅の柱のかげに坐らなければならないことになつています。また、もう一つの図書館では土曜の午後だけ女子の利用を許しているのだそうです。又、法学部から女子を閉め出していたある著名の大学が、憲法の聽講を希望した少女に、部屋の片隅にカーテンを下げてその後に坐れば聽講しても構わないといつたのもそう遠い昔のことではありません。

しかしとにかく、婦人はここまで前進して来ましたし、これからも前進するでしょう。今まで偏狭に女子を拒んで来た幾つかの大学にも、学生として、又少数ながら教授をして、婦人は進出しているのです。

人口上の変化

もう一つの重大な変化を指摘しなければなりません。それはこの国全体の人口、各年令階級の人口、就学者数、既婚者数等の変化です。なぜならこういう人口上の変化は婦人の雇用と密接な関係があるからです。

今日の家族が開拓期よりも小さくなつたということはさつき申しましたが、このことは婦人が小さい子供の世話をするために職につけなかつた年数をずつと短くしました。もつとも一部の婦人は、小さい子供が家にあろうがなかろうが、家計を支えるため、或は家計を助けるため、いやおうなしに仕事を持たなければならないのですが……。

一九四〇年の婦人労働者数は千三百万人です。これは一八七〇年の男女総労働者数とほぼ同じです。勿論一九四〇年の全婦人人口は一八七〇年の三倍になっていますが、婦人労働者数の方は実に七倍に増加しているのです。

このように婦人労働者の数がふえたのは、或る程度迄「人口が老いつつある」ためです。人口が老いつつあるといっても、乳幼児の死亡率が低くなり、成人に達する人の数、天寿を全うする人の数がふえたということにほかなりません。これは婦人について特に云えることです。一八七〇年の婦人の中間年令は二〇才です。（つまり国中の婦人の半分は二〇才以下、半分は二〇才以上です。）ところが一九四〇年になると二九才が中間年令になっています。むろんこのことは一八七〇年よりも働く年令階級の婦人が大きな比率を占めていることを意味します。一九四〇年には二〇～二四才の年令階級の婦人が他の年令階級よりも最も多く労働力中に出ています。

工業経済の初期には幼い子供迄が長時間、重労働に、それも時には危険な仕事に従事するのが普通になっていました。今でも地方や産業によっては子供が十分に労働法や教育法の保護を受けていないところもありますが、大部分の児童が守られているということは事実です。児童のみならず、二〇才以下の若い人の労働力中に占める比率も非常に低下しています。

第二章　事務的職業（ホワイト・カラー）への進出

高等学校に在学して就職のことを考えている女学生は殆ど皆事務的職業（ホワイト・カラー）を胸に描いているでしょう。三五〇万人という数だけを考えれば、ホワイト・カラーはたしかに一九四〇年の重要な婦人の職業グループです。数においてこれにまさるものは、ホワイト・カラーより二五万人多いサービス業だけで、ホワイト・カラーがこんなにめざましく伸びたのはタイプライターのおかげです。

始めてタイプライターが市場へ出たのは一八七〇年代で、当初から婦人の手で操作されました。他の事務用機械も後から発明されましたが、それも大部分婦人の手で動かされるようになりました。これらの機械、殊にタイプライターの操作では婦人は非常な適性と技能を示し、とうとうどの事務所にも少くとも一人の婦人がいるという状態を現出しました。一九四〇年にはホワイト・カラーに従事する女子の中約四分の三は事務所で働いています。

「ホワイト・カラー」という言葉は単に事務所の仕事だけを意味するのではありません。「ホワイト・カラー」とはかなりあいまいな言葉ですが、ここでは国勢調査で「書記的、販売的、並びにそれ

に類する業務」と呼んでいる仕事を指すことにして、よくこの中に分類される専門的、準専門的職業はここには含めず後章で述べることにいたします。

一八七〇年の女子ホワイト・カラー・ワーカーの数は一九四〇年の二五七分の一という僅かなものでした。概数で云うと、一九四〇年の三五〇万に対する一万三千五百です。（一九四九年にはこれが殆ど六百万に達しています。）

もしあなたが一八七〇年に二〇人の女子ホワイト・カラー・ワーカーに行き会ったならば、その中一四人は販売員、三人が事務員、二人が外交販売員、一人が電信員だったでしょう。けれども一九四〇年に二〇人に行き会ったならば、その中販売員は五人だけで、一四人が事務員、一人が電信、電話、ラジオ、又は無電の従業員だったでしょう。

女の郵便配達人は一八七〇年にもいますし、一九四〇年にもいますし、一九四〇年に外交販売員がいないわけではありませんが、他のホワイト・カラー・ワーカーに比べて非常に数が少いので、普通一般の二〇人のグループには見当らないでしょう。

事務員（オフィス・ワーカー）

「事務員（オフィス・ワーカー）」ときくと、あなたは多分「女の速記者、タイピスト、書記」等をお考えになるでしょうが、これがもし一八七〇年だったら、そういう連想はなさらなかったはずです。何故なら一八七〇年には、「速記者、タイピスト、秘書」「積出、荷受係」「その他の事務員」の三グループをあわせても女子は千人に満たない数であったのに対し、男子は二万九千人近くがこの種の仕事にたずさわっていたからです。

けれども一〇年後には女子の数は二倍以上になり、更に一〇年の後には二〇倍に飛躍しました。タイプライターと、それを使う女子の技能のおかげです。一九〇〇年には更に女子の数は倍加しました。この度は計算器その他これに類する機械――これも女子のものになりつつあった――を操作する第四のグループが立ち現われたのです。

次の一〇年間に女子のオフィス・ワーカーの数は三倍以上になりました。次の一〇年間、即ち一九一〇年から一九二〇年の間には三倍には達しませんでしたが、今迄のどの一〇年間にも見なかった程多数の――ほぼ六五万二千人の婦人が事務系統の仕事に入っています。この町は丁度大戦があらゆる職業分野に婦人の進出を促した時期です。

一九二〇年以降、増加の比率は大分緩慢になりました。一九四〇年の女子のオフィス・ワーカーの数は一九二〇年当時の五分の四に足りません。けれどもやはり百万単位を以て数える人数ですから大

したものです。

一九四〇年には女子のオフィス・ワーカー（速記者、タイピスト、秘書、事務機械操作員、積出荷受係、その他の事務員）の数は一八六万人以上ですから、この国の全人口を比べてみると、約七一人に一人の婦人オフィス・ワーカーがいるわけです。（一八七〇年には四万二千八百人に一人でした。）このことは巨大な商業の網状組織に、又その配布活動に婦人の手がいよいよ重要になつて来ることを物語つています。

事務系統の仕事に進出した婦人達は、男子に置換わつて進出したのではなく、全く新しい分野に出て来たのです。前にも述べたように、タイピストその他の事務機械を操作する人人は初めから婦人だつたのです。一八七〇年に百人中三人の割であつた婦人オフィス・ワーカーは一九四〇年には半ばを超すまでになりました。一九四〇年に事務的業務にたずさわる男女の割合をとく大まかに云えば次の通りです。

二五人の積出、荷受係の中――一人が女子、二四人が男子

二五人のその他の事務員の中――九人が女子、一六人が男子

二五人の事務用機械操作員の中――二一人が女子、四人が男子

二五人の速記者、タイピスト、秘書の中――二四人が女子、一人が男子

では以上四つの分類の中、一八六万の婦人オフィス・ワーカー達はどれを一番好んでいるでしようか。

百人中五九人が速記者、タイピスト又は秘書

二百人中一人が積出、荷受係

百人中三八人がその他の事務員

百人中三人が事務機械操作員

事務系統の仕事は多くの婦人を魅惑しました。オフィス・ワーカーは工場の工員などよりは頭を使う仕事と思われ、比較的高い社会的地位を認められていたからです。けれども事務機械の使用が盛になり、仕事がだんだん特殊化した反復作業になつて来たため、もはやそういう仕事にそれ程頭の働きが要るかどうかが疑わしくなつてきました。

ところでオフィス・ワーカーと結婚の問題はどうでしようか。既婚婦人を雇わなかつたり、結婚すると免職したりする傾向が、事務系統の仕事への既婚婦人の進出を阻んでいるらしく、全婦人労働者中に既婚婦人の占める割合と比べると、オフィス・ワーカー中に既婚婦人の占める割合は少くなつています。けれども他の部門と同じく、その割合が次第に大きくなりつつあるということは云えます。

簿記係、会計係、出納係

簿記係、会計係、出納係は昔からホワイト・カラー・ワーカー中の花でしたが、一八七〇年には婦人はごく僅か――たった九百人程で男子はその四〇倍でした。しかし一八八〇年以後婦人の割合は急速に上昇し、一九三〇年から一九四〇年頃迄には半数を上回る程になりました。数にして五〇万近い人数です。

どうしてそんなにふえたのでしょうか。商業の規模がいよいよ大きくなり、日日の会計事務はますますぼう大になったため、それを記録、分析する必要が生じたこと、原価や利潤の正確な知識が必要となったこと、所得税その他のために数字を政府に提出しなければならなくなったこと、そしてそれらの一般会計事務を行うために機械を用いる必要が起ったことがその理由です。何故なら、そういう仕事を全部手ですれば、恐ろしく高くつくからです。そんなわけで、ここでも機械が婦人の雇用機会を拓く要素の一つとなったわけです。

一八七〇年には人口四万五千に対して一人の婦人簿記係、会計係、又は出納係しかいませんでしたが、一九四〇年には二七七人に対して一人となりました。

電話交換手、電信員

電話交換手は初め男子でした。一八七〇年代の初めに発達した電話業は、それ迄家庭内で行われて来たどの仕事とも関係のない、全く新しい業務でした。ですからそれ迄婦人のして来た仕事と、電話交換手との間には、世間が電話交換手は婦人の適職だと認めるような何の因果関係もなかったのです。けれども男子の交換手はお客に「口答え」したり、時に気まぐれのお客があったりすると、仕事が済んだ後に探し出して喧嘩をふっかけるので有名になりました。

そこで二年半後には女子の交換手が雇われ、お客にも会社側にも喜ばれましたが、間もなく女子の交換手は男子を駆逐して、一九〇〇年には八〇%、一九四〇年には九五%を女子が占めるようになりました。

一九〇〇年頃共電式交換台が発明されて、個個の通話をつなぐ時間が非常に短縮されました。けれども電話を家庭にひく人の数はふえる一方ですし、会社は拡がつて事業をますますスピード・アップするために電話を使うので、一人一人の交換手が莫大な回数の通話を扱えるようになったにもかかわらず、もつと交換手を雇入れなければなりませんでした。

電話交換手が非常な増加率を示したのは一九二〇年の前で、一九二〇年から一九三〇年にかけては増加率がややゆるみました。市内電話がダイヤル装置になつたことをはじめ、その他の装置の改善によつて、一人の交換手の消化できる通話数がますます多くなつたのですが、電話の使用はふえる一方ですから、増加率が緩慢とはいいながら、交換手の実数はふえています。

ただ一九二九年の株式恐慌につづく一九三〇年代の不況期には電話利用者の数は減少し、その結果経費を節約するために、電話会社はますます労働を省くような装置を備えて人員の屈入れを控えました。景気の回復した一九四〇年になつても電話交換手の数は一九三〇年に及びませんでした。

少数の都市ではありますが、ダイヤル装置を長距離電話に用いているところがあります。他の都市でもやがてダイヤルを採用するようになるでしょう。そうなれば必要な交換手の数は少くなるに違いありません。しかしとにかく二〇万人の婦人労働者を抱えている職業が重要なものであることは確かです。

電信の発達は既に一八四〇年代のことです。電信も男女双方に新しい職場を与えました。けれども婦人の就職者は電話交換手の場合程めざましくはなく、一九三〇年から四〇年の不況期には交換手よりも更に大きな人員減少を見ました。

無線電信は一九二〇年代になる迄本格的に発達しませんでした。そして無線電信員中婦人の数は取ろに足らないものです。

以上電信、電話、無線電信の操作員を合せてみると、女子の数は一八七〇年の三百人から一九三〇年の二四万六百人迄増加し、一九四〇年には二〇万五千六百人に落ちています。一九五〇年の国勢調査の結果再びふえたか、それとも減つたかはまだ分りませんが、この職種が相変らず注目すべき女子の職場であることだけは確かです。

病院及び歯科医の助手

近頃の病院や歯科医の助手は、今迄医師が自分の手で行つていた仕事もするようになりました。医師の使う器具を消毒して並べ、診察や治療を受ける患者の支度を助け、治療中医師の要求する材料や器具をととのえ、患者の気持を和げ、研究室の仕事迄手伝います。このような仕事は他の職場の事務員と大分異りますが、やはり記録や帳簿をつけたり、電話をとつたり、日取をきめたりする点では同じです。

一九一〇年以前に病院、歯科医の婦人助手がどのくらいあつたかははつきりしません。一九一〇年の国勢調査で初めてこの職種が類似の項目から分離されて独立に数えられたからです。この年の調査

では五千人が数えられましたが、一九二〇年には二倍となり、一九三〇年には更に二倍になりました。

一九三〇年から一九四〇年迄の間にはそれ程急速には増加せず、五分の一ちよつとがふえただけでした。不況時代だつたので、医師も歯科医も助手を雇うだけの余裕がなかつたのでしよう。又この年には、看護婦で助手をしていた人達は、調査の際助手としてでなく高級看護婦として数えられたためかも知れません。

ともかく、医師の仕事が次第に専門化し、入念な記録が必要となつて来たため、余裕さえあれば助手はますます雇われる傾向にあります。戦前には助手を使つていなかつた医師が、陸海軍の軍医として助手を使うことに慣れ、帰還してからも助手なしでは済まされなくなつたという例もたくさんありますし、又医師が非常に不足しているため、助手を雇つてできるだけ多くの患者をみようとする人もたくさんあります。

助手の仕事は、婦人の適職と認められている速記者、タイピスト、秘書の仕事とも共通点を持つていますし、又昔から家庭で婦人の受持ちときまつていた病人の看護ともつながりを持つています。ですから一九一〇年に五人の助手の中四人迄女子であつたこと、一九四〇年には二〇人中一九人迄が――実数にして三万人が女子であつたことは少しも不思議ではありません。

出張員、集金人

一八七〇年の国勢調査では、女子の出張員、集金人、掛売人は一七人でした。一九四〇年には二万三千五百人近くもおりましたが、この時には出張員、掛売人の外、仕入人、農村生活改良普及員、集金人も同じ項目に含まれていました。何か新しい型の職種が発展しても、一九一〇年の病院、歯科医の助手のように国勢調査で新たな分類項目を設けるに足るだけの人数がまとまらないうちは、どこかの項目に含められるからです。

例えば農村生活改良普及員の仕事は、農業と家庭経済とが応用科学の一つとして認められ、大学で教えられるようになつてから、ごく最近発達したものです。普及員には多く農業、家庭経済科の卒業生がなつていますが、その仕事は農村の人人に、農場や農家の経営方法についてよりよい知識や指示を与えることです。彼等は道具や設備の使い方、新しい方法のやり方を実地に例示したり、それについて農夫やその妻と話したり、農村の男女を集めて講演をしたり、討論をさせたり、時には青年のクラブを組織して、彼等に農場、農家の経営や地域活動のため適切な指導を与えたりします。

普及員には相当数の婦人がいます。一九三〇年には百人に二九人、一九四〇年には百人に四三人で

した。これも開拓期に婦人が家庭でしていた仕事とつながりを持つ仕事の一つです。

けれども農村生活改良普及員は出張員、掛売人、仕入人、集会人の全体からみればほんの一部に過ぎず、これら全体の中で女子の数は、一九三〇年に百人中八人、一九四〇年に百人中一一人に過ぎません。

給仕、使送係

「給仕、使送係」には女子は少数です。一八七〇年には僅か四六人、一九二〇年に八千五百人でこれが今迄の最高の数です。一九四〇年には五千人も減ってしまいましたが、それは多分一四才以下の子供が含まれなかったためと思われます。（それまでの国勢調査は一〇才以上の全労働者を数えましたが、この年から一四才以上の労働者を数えることとなりました。）ともかく一九四〇年には女子の給仕は二五人に一人の割でした。

女子の電報配達人に殊に少く、一九四〇年には五〇人に一人以下の割でした。州によっては二一才以下の少女に電報や私信の配達をさせることを禁じているところがあります。仕事が若い女子に不向であるのが女子の従業者の少い理由でしょう。

郵便配達人

一九四〇年に女子の郵便配達人は百人中一人、実数にして千五百人です。郵便制度が、今日と比べたら巨人と赤ん坊ほどの差のあった一八七〇年にはたった五人の女子配達人がおりました。女子配達人は大抵田舎で働いています。田舎には町のように自分の好きな仕事を選べるほどたくさんの職種がないからでしょう。又町の配達人は重い郵便袋を背負って徒歩で歩き廻らねばなりませんが、田舎の配達は自動車でできて楽だからでもありましょう。

販売員

私達の生きている現代はいろいろの名前で呼ばれますが、その中に「販売の時代」というのがあります。品物を生産したり、加工したりする場所から、それを食べたり、使ったりする人の手に移すまでに莫大な数の事業、職業、人間が介在しているのでそう呼ばれるのです。一九四〇年にはそのために三百万近い人が販売員、買附人、販売代理人、注文取、発送人、売子として働いています。七〇年

前には二五万人（そのうち婦人は九千人）にも足りませんでした。それが一八七〇年から一九四〇年までの七〇年間に婦人の数は八五万人を超すまでに増加し、一八七〇年には販売にたずさわる婦人の数は四、四一一人に一人の割であつたのが、一九四〇年には一五四人に一人となりました。

南北戦争の直後から、さまざまの新販売法が発達し、デパートだの、メール、オーダー取扱店だの洋品や食料品のチェーン・ストアだのがぞくぞくと生れ、それに伴つて婦人の職場も拓けました。最も多く婦人が販売業に就いた時期は一九二〇年から一九三〇年の間で、これにつづく不況時代には就職率は低下しました。

一九四〇年の販売業に従事する婦人に、種種の販売的業務中一番好きなものを選ばせたところ、一〇人のうち九人迄が売子を選びました。男子で売子を選んだのは一〇人中五人で、他は別の販売業務を好んでいます。

一九〇〇年以前には製造者は製品を卸売商や仲買人に売り、卸売商や仲買人が更に品物を小売店に売り、それからお客の手に渡るような仕組になつていました。けれども一九〇〇年以後には新しい販売法、新しい販売「技術」が発達しました。製造者が自らセールスマンを雇つたり、販売代理店をきめたりして、製品を直接商店やその他の「販路」へさばくようになつたのです。この種の販売員は男子の独壇場で、女子は僅か五〇人に一人でした。

販売技術の中には全く新しいものもありますが、実演販売員の技術は新しいものではありません。実演販売は品物の使い途や値打をお客に説きながら実地に使つてみせる技術で、一八七〇年にも既に用いられていました。これは主に女子の仕事で、一八七〇年に五人中三人未満が女子であつたのが、一九四〇年には五人に四人以上が女子となり、実数にして五百人から八千七百人にふえました。

販売業にたずさわる全職種――セールスマン、買附人、販売代理人、注文取、発達人、売子――のうち女子の割合は次の通りです。

一八七〇年は百人に四人
一八八〇年は百人に八人
一八九〇年は百人に一五人
一九〇〇年は百人に二一人
一九一〇年は百人に二五人
一九二〇年は百人に三〇人
一九三〇年は百人に二七人
一九四〇年は百人に二九人

年輩の婦人――四五才以上――も事務的職業などよりは売子、販売員、実演販売員等にうまく進出

しているようです。既婚婦人の場合は特にそうで、一九四〇年には売子、販売員、実演販売員の五分の二は既婚者でした。

行商人

開拓期には品物を売りさばくのは主に行商人の役でした。けれども行商人はだんだんと姿を消して今日の経済にはあまり大した意義を持っていません。けれども一九四〇年には男女あわせて五万七千人――一八八〇年とほぼ同じ位の行商人がおり、その中女子は二千五百人（ほぼ一八八〇年に同じ）です。一八七〇年には千五百人でした。割合から云うと女子の行商人は何時も百人に三人か四人の割でした。

保険の代理人及びブローカー

保険の代理人は少数ですが、漸時増加しています。人口がふえるにつれて、生命保険を売込む機会も当然ふえて来るわけですが、もう一つの理由としては貨幣経済下における家族の生活不安を慮って生命保険をかける男女の数がふえたためです。昔の農家は縁故者――殊に仕事の手助けになる縁故者は容易に引取つたものですが、今ではそういう家はめつきり少くなり、働き手を失つた家族も金銭収入に頼るほかなくなりました。そこで生命保険が大衆にとつて魅力ある貯蓄方法となつて来たのです。生命保険は種種の形式、用途を持つていますが、保険にはこのほか、自動車、火災、健康、傷害等の保険があり、漸時発達しつつあります。

婦人は保険売込の能力をいかんなく発揮しました。一九一〇年以来、保険代理人中に占める女子の割合はふえる一方です。教師とかその他自ら生計をたてている職業婦人を対象とする場合には殊に実績をあげているようです。

この仕事には或程度年をとつている方が有利なためか、年輩の婦人がたくさん進出しています。一九四〇年の保険代理人の中間年令は四四・五才でした。（半数が四四・五才以下、半数が四四、五才以上。）

国勢調査で保険代理人を独立の一項目として明確な数字を出したのは一九一〇年が初めてで、この年の女子の数は二千五百に足りませんでしたが、一九四〇年の国勢調査では一万四千人をこえています。

不動産の販売人及び管理人

不動産を売つたり、管理したりする仕事では婦人は保険勧誘よりも更に一そうの腕を示しています。一九四〇年には四万三千の婦人が外交員として、管理者として、或は建物監督人として働いていますが、これは一九一九〇年の一四倍に当る数です。年輩に達して、判断力を備えた婦人は特に成功するらしく、不動産売込みにたずさわる婦人の中間年令は四九才です。

又この分野に働く人のうち婦人の占める比率は次第に大きくなり、一九一〇年には百人にわずか二人であつたのが、一〇年後には百人に六人、更に一〇年後には百人に一三人、そして一九四〇年には百人に二〇人となりました。

新聞配達人

一九四〇年以前には女子の新聞配達人は五百人に足りませんでした。一九四〇年にも僅か千六百人で五〇人に一人ちよつとの割合です。電報配達人と同じく、少女向きの仕事でないと考えられているために数がふえないのでしよう。

第三章　工業労働に従事する婦人

工業労働者は私達のパンを焼き、果物、野菜、肉、魚をかんずめや漬物にし、菓子、煙草をつくり、私達が着たり、家庭で使つたりする布を織り、染め、種々の布製品にこしらえ、私達が書きものに使う紙や印刷、包装、製箱に用いる紙をつくり、その他、本、雑誌、新聞、靴、なめし皮、硝子、陶器、化学薬品、電気機械器具、時計、宝石類、自動車、電車等等、無数の生活必需品や奢侈品をつくる人人です。私達が一日も、否一刻も欠くことのできないこれらの人人のうち、一九四〇年には二百万人が婦人でした。戦争中これらの婦人は、戦場に出た男子にかわつて、生活用品許りでなく、飛行機、船舶、銃等をつくりました。（最も新しい一九四七年の数字によれば、工場に働く婦人の数は三百万人を超すと算定されています。）

工業労働者といつても、その技術や責任の程度は千差万別です。多くの仕事は単純な反復作業ですが、リベット工、鋲接工、旋盤工、精密検査工、らせん工、ミーリング工、研磨工は非常な熟練を要する仕事で、こういう仕事に戦争中進出した女子が今も働いています。モデル　メーカーは材料や方

法を工夫してモデルをつくりあげます。時計製造工は一人前になるまでに長い年期を入れた後、試験を受けなければなりません。熟練、半熟練を要す工業労働の種類は無数で、全部並べあげることはとても不可能です。

ある種の工業労働は非常な技能を要し、ある種の事務的業務は非常に機械化して来たため、今日ではもはやオフィス・ワークは頭を使う仕事で、工場作業は頭の要らない仕事だなどという通俗的観念はあてはまらなくなりました。

一八三〇年には女子工業労働者中四分の三が、被服工場や綿紡績工場で働き、或は工場の外で洋服屋や仕立屋をしていましたが、一九四〇年には繊維業に従事する者は半分以下となり、後は他の製造工業、土木建築、自動車運転手、地下鉄、電車、鉄道の従業者として、そして少数ではありますが電話、電信工、製材工として働いています。一八七〇年に「非消耗品工業」――鉄鋼、金属製品、材木、家具、硝子、陶器、石材製品――に働く婦人労働者の数は五〇人に一人でしたが、一九四〇年には一〇人に一人となつています。（一九四七年には四人に一人です。）

食料品製造工

一八七〇年代には、調理したり、焼いたり、貯蔵したりは各家庭の仕事でした。家庭の食膳にのぼる食物の大部分は、支払われざる労働――材料をつくる男子と、調理する女子の労働の結晶として現われたのです。けれども工場に雇われて食料品をつくる人人もありました。それはチーズ、キャンデー、精糖、肉の加工品をつくる人人でしたが、最も多いのは粉ひきと、パン焼職人でした。なぜなら粉ひきとパン焼職人は独立戦争前の各地の粉ひき工場や、貿易商の製粉工場、船のりの堅パンを焼く工場で、あらゆる産業に先んじて活動していた職種だからです。（ジョージ・ウシントンの建てた粉ひき工場の建物が今もワシントン市の近郊に残っています。）

一八七〇年代に製粉工場ではローラー加工の採用その他の改良が行われ、同じく一八七〇年、八〇年代には食肉を冷凍、かんずめにすることが始められました。これらの新しい食品加工、保存法は食品商工業に一大飛躍を齎しました。同時に人人は農村を離れて都市に集るようになったため、工場製食料品の需要は増大し、そういう食料品が利用されるようになったために、婦人が家庭の外に出て雇用労働につくことが容易になったのです。

以上すべての結果により、食品製造業に働く婦人の数は一八七〇年の二千五百から一九四〇年には一五万迄増加しました。（一九四七年には二五万を超しています。）

婦人は昔ながらの家庭の仕事であつた食物調理を追つて工場へ出てきたわけですが、一八七〇年に

は百人中三人が婦人であつたのが、一九四〇年には（一九四七年も同じ）百人に二四人となりました。けれども食物調理が台所から工場に移行する前の時代と比べれば、明らかに男子が調理に、より大きな役割を果すようになつています。

一九四〇年の女子食品工業労働者から二五人を取出せば、その中六人が果物、野菜、海産物のかんずめ工場に、六人が製菓工場に、六人が製パン工場に、四人が食肉加工工場に、二人が穀物その他の食品工場に、一人が酪農場に働いています。

かんずめ工

食品工業はとかく季節的なもので、一年中仕事をしているということが少いのですが、果物、野菜、海産物のかんずめ工場については特にこのことが云えます。これらの食品はその季節だけ、それも生産地の近くでだけ加工することができるので、かんずめをつくる季節に工場に来て働く婦人は工場の近辺に在住する人が多いのです。

南北戦争前には、魚や牡蠣の保存がかんずめ工場の主な仕事で、それも決して大きな工業とは云えない規模のものでした。けれども一八七〇年頃迄にかんずめ工場は一年のうちもつと長い期間仕事をする方法——多には魚や牡蠣を加工し、夏には果物や野菜を加工することを考え出しました。その上

機械を使つて魚、果物、野菜の下ごしらえをし、調理、保存の新方法を採用し、機械でかんずめにするようになつて、かんずめ工業はますます大きくなりました。

一九〇〇年以後には女子の仕事に影響する変化がいくつも起りました。かんずめの衛生消毒が行われるようになつたこと、豆の莢をとり、皮をむく機械、唐もろこしの皮をむき、毛をとり、切る機械、果物、野菜の大きさによりわける機械が発明されたこと、運搬ベルトが使われるようになつたこと等がそれです。その結果、例えば今までに一千箇の豆や、とうもろこしや、桃や、杏のかんずめをつくるに一〇人の人手が要つたのが、五人でできるようになりました。けれども工業自体はどんどん膨脹しますので、女子労働者もますます殖われています。一九一〇年には女子かんずめ工は五千五百人であつたのが、一九四〇年には三万七千五百人になりました。畑にあるのと同じ位新鮮な野菜や果物を食卓に運ぶ短時間冷凍法はこの種の工業にいよいよ大きな刺戟を与えています。

製菓工

キャンデー等のお菓子類をつくる仕事も季節的なものです。製菓工場には一年中たくさんの婦人が働いていますが、クリスマスの需要を控えた秋にその数は最大に達します。婦人はお菓子をつくる仕事には特に適し、非常な熟練と技術を要する仕事も巧みにやつてのけます。

例えば手で衣をつける、高価なチョコレート加工専門の手がけチョコレート工などは機敏で、器用で、しかも十分の知識を持つていなくてはなりません。彼女はキャンデーの芯と、チョコレートその他の衣材料を溶かした小さな器を持つて働くのですが、時には自分でチョコレートの調子もとととのえます。又器についているスイッチやバルブで温度を調節して、絶えずチョコレートを適度のやわらかさに保たねばなりません。それからキャンデーの芯を器のチョコレートに落し込み――ここが極意中の極意なのですが――すばやく指先ですくいあげ、巧みにひねつて滑らかな、むらのない衣をかぶせると同時に、芯材料の目印となる飾模様をつけるのです。くるみだの櫻ん坊だのその他の飾を上にのせることもあります。チョコレートからすくいあげて、衣を仕上げるのにフォークを使う場合もありますが、その時には「フォーク工」と呼ばれます。

「オーナメンター」或は「デコレーター」と呼ばれるお菓子の飾つけ工も相当の熟練を要する仕事です。家でお菓子の飾つけをしたことのある方は御存知でしようが、小さな口のついた袋から材料を押出しながらデコレーションをつくつていくのです。この袋をいかに巧みに動かすかにデコレーションの成功不成功と、お菓子の値段とがかかつているわけです。

コーダーは衣つけ機で衣をつけたキャンデーの頭を仕上げる工員で、指の間に少量の溶けたチョコレートをつまみ、キャンデーが運搬ベルトにのつて衣つけ機から出て来るところを斜線だの曲線だの模様をつけます。こうしてキャンデーの芯の目印をつけ、手づくりの衣を着せたような趣にも見せるのです。

製菓工業はこの外、熟練、未熟練あわせて多くの職場を女子に提供しています。国勢調査の結果では、一九一〇年には二万人、一九四〇年には三万五千人の女子工員がいます。一九一〇、二〇、三〇、四〇年共、この部門の全労働者中五分の三は女子が占めています。（一九四七年も同様でした。）

食肉加工工

曾て食肉加工業の中心的な仕事だつた屠殺と、解体に従事した女子の数は少く、近年になつて肉の加工業が発達してから女子の職場がひらけ、ソーセージ、詰肉、ラード製造業の加工部門が大部分の女子の職場となりました。殊に食肉加工に高度の清潔さを保ち、消費者の安心を買うようになると、そういう仕事が又女子のものとなりました。こうして女子工員の数は、一九一〇年の四千人から一九四〇年の二万四千人へ、五〇人中三人であつたのが、五〇人中九人へと増加しました。（一九四二年には五〇人に一〇人となりました。）

製パン、焼菓子工

昔では船のりや旅行者用のもの以外のパンはすべて家庭でつくられていましたが、今では製パンは殆ど商工業に移行し、男子の手でつくられています。パン焼職人はケーキやパイもつくります。仕事は重労働で、しかも深夜業が多いため、女子は仕上げ、包装等の軽作業に廻されています。

クッキー、ビスケット、クラッカーの製造には多くの婦人が従事しています。このような仕事は最初手で行われていましたが、一八四〇年以後は機械で行われるようになりました。製パン工業が盛んになつた第一の時期は、堅パンの需要が激増した南北戦争の時です。次いで一九〇〇年頃には多数の工場が合併して一つの工場をつくり、機械力を利用して大量のクッキー、クラッカー、ビスケットを製造し、それを包装することを始めました。以後次次とこれに倣う会社が出ました。

包装とレッテル貼りは婦人に新しい職場を提供しました。一九一〇年には約七千人の婦人労働者が製パン業に従事していましたが、一九四〇年には三倍にふえました。しかし男女を合せた全工員中婦人の占める割合はあまり変化せず、一九一〇年には二〇人に八人、一九四〇年には二〇人に九人となつた程度です。

酪農製品工

一九世紀の後半に、クリーム、煉乳、チーズ製造工場は酪農農家の仕事を奪つて、ミルクやクリー

ムの加工、バター、チーズ、煉乳、そして終にはアイスクリームの製造まで行うようになりました。酪農製品製造に従事する女子の数は一九一〇年に六百、一九四〇年に六千五百で、多い数ではありませんが、急速に増加しつつあります。全工員中女子の割合は、一九一〇年に二五人に一人、一九四〇年に二五人に三人です。

穀製品、その他の食品加工工

この種の労働者のつくる食料品には小麦粉、砂糖、オートミール、コーンフレーク、ベーキング・パウダー、マカロニのようなものが含まれます。女子工員の数は一九一〇年に六、二五〇人、一九四〇年に一万四千六百人で、男女全工員中の割合は、一九一〇年には百人に一三人、一九四〇年には百人に一六人でした。

飲料品製造工

女子飲料品製造工に起つた一番の大事件は禁酒法でした。その前からもこの部門に働く女子の数は決して多くなく、一八七〇年に僅か一九人、一九一〇年にも二千三百人許り増加しただけでした。

禁酒法は一九二〇年一月に実施されました。この年に国勢調査が行われましたが、女子工員の数は九百人に減少していました。一九三〇年には再びふえましたが、ふえたと云つても七〇人にも足りない数です。

一九三三年に禁酒法は廃止され、やわらかい飲物が大流行しました。その結果一九四〇年には飲料品工業に働く婦人の数は七千六百、殆ど八倍となりました。人数自体は決して多いとは云えませんが、千人中女子は一人であつたのが、百人中一人になつたのです。

煙草製造工

一九一〇年頃のいわゆる喫煙人は「手製丈長葉巻でなければ……」と云つたものですが、今日では機械づくりの葉巻でも十分に満足を与えることができるようになりました。一八八〇年までに手巻であつた紙巻煙草も、今ではすつかり自動式機械でつくられるようになりました。（自動式といつてもやはり人がつきそつていなければならないのですが……。）

煙草が機械でつくられるようになつたため、最初は多くの労働者が職場を追われましたが、やがて煙草製造業により多くの女子工員が雇われるような結果となりました。その理由の一つは女子でも機械を操作できると認められたからですが、もう一つは男子の労働組合員が機械採用に反対したため、未組織の女子が雇われたのです。

一八七〇年に煙草製造業に従事する四千三百人の婦人は全工員の一〇分の一にあたります。一九二〇年には九万九千人となり半分を上回りました。男子が紙巻煙草を好むようになつたことと、婦人が喫煙するようになつたこととは煙草製造業をいよいよぼう眠させました。けれども機械の性能はますますよくなり、工員一人当りの生産高もどんどん上昇しましたので、一九二〇年以後女子工員の数は減少し、一九四〇年には六万一千人となりました。しかし割合としては女子は全工員中五分の三を占めています。（一九四七年もほぼ同じです。）

繊維製品製造工

タイプライターは婦人に事務所への道を拓きましたが、紡績機械と、織物機械は織工場への扉を開きました。工場は婦人のみならず子供も歓迎しました。女子供は怠けずに働かせることが容易だし、国の富に寄与するところ大であろうと、世間一般も使用者も考えたのです。

一八七〇年には一〇万四千の女子繊維労働者がいましたが、一九四〇年には五〇万近くなつていま

した。（一九四七年には優に五〇万を超しました。）その職場は綿と毛の工場から、絹人絹の工場、編物工場、染色仕上工場、じゅうたん工場、その他レース、オイルクロース、ロープ、縫糸等の繊維製品工場へと拡つてきました。全繊維労働者中、女子はずつと一〇人に四人乃至五人の割合を占めています。

綿紡績工

家庭の炉辺に置かれ、長い間家庭の象徴的役割を務めてきた糸紡車は、紡績機が工場に入つて来て糸に紡ぐようになると、屋根裏部屋へ追放される運命となりました。糸紡車は婦人の手で操られておりましたが、工場で初めて使われる紡績機もまた大部分婦人の手で動かされたのです。けれども一八四〇年以後は、依然として大量の婦人が紡績業に雇われているとはいうものの、男子が女子に取つてかわる傾向にあります。

これに反して、織布は初めから男子の仕事でした。けれども動力織機が入つて来て仕事を軽くする一方、紡績機が織布工が布に織りきれない程の糸を生産するようになると、女子の手が求められるようになり、一八五〇年代にはもう織布は女子の仕事だと考えられる迄になりました。それが再び男子に置きかえられ出したというのは、織機がいよいよ大きくなり、非常な速度で回転するようになつたことと、移民男子が大量に流れ込んで職を求めたことのためです。一八七〇年の婦労働者中女子の割合は一〇人に六人でしたが、一九四〇年には一〇人に四人となりました、（一九四七年も同様です。）

紡織機が工場に備えつけられた当初から、子供は工場で働いておりました。又子供が機械の運転を習うのは町や村のためによいことだとも思われていました。南部の工場では、一九〇〇年代に至るまで一〇才未満の子供が「手伝い」として、或は普通の職工として働いていました。

子供が綿工場で働くのは、子供の健康のためにも福祉のためにもよくないということが一般に認められるようになつた時、経営者も今迄程子供の労働力を利用しないようになりました。それには二、三の事柄が与つています。第一は児童労働に関する法律と、義務教育に関する法律です。第二は機械が発達して、子供に扱いにくくなつたこと、そして第三は最低賃金制が布かれて、それ以下の賃金で人を雇うことが不法行為となり、同じ賃金で大人が雇えるところへ子供を雇つたのでは、もはや子供を雇う意味がなくなつたことです。

先ず第一に救わなければならないのは一番幼い子供達でした。一九一〇年に五、一三〇人もいた一〇才から一三才までの少女工は、一九三〇年には一〇七人に減りました。そしてだんだんに年上の子供達にも救の手が伸べられました。一九一〇年に三万人であつた一八才未満の少女工は、一九四〇年には二千五百人に減りました。二千五百人中一六才未満の者は僅かです。

これに反し、一九二〇年頃より、二〇才から四四才までの女子紡織工は、数においても、全女子紡

織工中に占める比率においても、非常に増加しました。四五才以上の者の比率も高まりました。既婚者の割合も三分の二という高率です。これには曾で繊維工場に一家族全部が働いていた頃の遺風が影響していると思われます。

編製品工

綿布製造が工場に移行して後も、靴下を編む仕事は、ペンシルバニア州を除いて、長い間家内工業によつて行われていました。家庭から工場に移つても、靴下製造はやはり主に婦人の手で行われました。下着、セーター、帽子、手袋、ドレス等の工場にも婦人が働くようになりました。南北戦争の後工場製編製品への需要は急速に高まり、それに応じて編立機も改良されました。殊に一八八〇年代にフルファッション メリヤス編立機が輸入されてからは編立工業は盛んになり、ますます多くの婦人が雇われるようになりました。

一八七〇年に婦人編立工の数は約二千人、全工員の半分ちよつとでしたが、一九〇〇年迄に一七倍になり全工員の四分の三を占めました。ところが一九二〇年頃から男子に地歩を譲り始め、一九三〇年、四〇年にはいずれも全工員中三分の二となつています。

フルファッション メリヤス製品がつくられ、非常な勢で買い求められるようになつたのは一九二〇年からです。技術を要する仕事が大部分男子に与えられたためか、女子は幾分この部門の主導権を失いつつあるようです。けれどもフルファッション メリヤス製品の生産量が莫大なため、この分野に入つて来る女子労働者の数はますますふえ、一九四〇年には一二万五千人となりました。

技術的な仕事が男子に与えられたと云つても、すべての技術的な仕事を男子が独占しているわけではありません。例えばトッパーというのは靴下の脚部を底部に切りかえる工員ですが、非常な熟練を要する作業で、通常女子が担当しています。又ルーパーというのは、靴下の爪先の上部と下部、及びかかとの下部をつぎ合せる工員ですが、これも非常な技術を要する作業で、女子の手で行われています。

毛紡織工

毛糸、毛織物は新興繊維に押されて、毛物工場に働く女子労働者に多大の影響を与えていました。一九二〇年から一九三〇年迄に女子労働者の数は六万四千から四万九千に下落しました。その理由の一つは産業の「近代化」です。産業の近代化によつて新しい仕事も生れましたが、一定の生産高を保つに必要な労働者の数はずつと少くなりました。（新しく生れた仕事をしては例えばドロップ・ワイヤー工があります。織機の後側に廻り、手で一本一本の経糸にドロップ・ワイヤーをつける仕事で、あまり熟

練技術を要しません。これは糸が切れた場合にワイヤーが落ちて機械がとまるようにするためです。）

毛紡織工の數が他の工員から分離して數えられたのは一九一〇年が初めてです。この時から男子に対する女子の割合は次第に少くなつて来ましたが、それでも一九四〇年には（一九四七年も同様）五人に二人で、その數も六万一千人を超しています。

絹、人絹紡織工

曾ては一般繊維の王者であつた綿、羊毛が幾分後退する一方、絹、人絹はますます重要性を増しつつあります。

今の絹及び人絹工業は一九一〇年以前には殆ど全く絹工業だけでした。人絹は一九〇〇年頃初めて市場に出た時には質の悪い繊維でしたが、一九二〇年以来非常な改良が行われて好評に価するものとなりました。一九四〇年までに多くの絹綿工場が人絹工場に鞍がえし、新しい人絹工場もたくさん建てられましたので、今では「絹及び人絹工業」と呼ぶほうが適切になつたわけです。

植民地時代には婦人は養蚕と織布の大黒柱でした。ですから絹工業を盛にするための奨励金をもらうのも婦人が多かつたのです。けれども養蚕の方はあまり重要な産業とならずじまいで、紡織だけが盛になり多くの婦人従業者を持つようになりました。

綿工業の場合と同じく、絹工業でも労働者數の割合は男子から女子へ、女子から男子へと傾きました。一八七〇年に広巾絹布手織機は男子の手で動かされていましたが、動力織機が入つて来ると多數の女子がこれに替りました。これに反し経糸を機械にかける整経工は一八七〇年には全く女子の仕事であつたのが、横型整経機が採用されるようになつたため、一九一〇年迄には完全に男子の職場となりました。リボン製造は又反対で、初めは習慣的に男子がリボン織機を動かしていたのが、一九〇〇年頃高速度織機が入つて来るに及び女子が取つて替りました。

女子毛紡工の數は、一八七〇年の二千三百という少數から、一九三〇年の七万五千七百にぼう脹しましたが、一九四〇年には再び四万八千二百に減りました。割合で云うと、一八七〇年の一〇分の七から一九四〇年には二分の一に下りました。（一九四七年にも二分の一です。）

敷物製造工

アメリカで生活程度がいかに速かに向上したかは、じゅうたんその他の敷物に対する需要の膨脹がよく物語つています。工業もよくこの需要に応じ、敷物製造技術の改良、生産工程の機械化と相まつて、一八七〇年から一九一〇年の間に非常な活況を呈しました。

女子工員の數は一八七〇年から一九一〇年までの間に六千から二万二千にふえました。けれども次

の一〇年間には一万二千に下り、その後は上つたり下つたりして、一九三〇年迄に二千人の増加を見ましたが、一九四〇年には再び一万三千と下つています。割合から行けば一八七〇年には全工員の三分の一、一九〇〇年には約半分、一九四〇年には五分の二近くなつています。

染色工、仕上工

繊維製品仕上工場の歴史は植民地時代に迄さかのぼることができます。そんな昔から「どこの町も誇るべき三種類の工場——製材工場、製粉工場、毛織物仕上工場——を持つていました。」

やはりその頃から、家庭で生産された織物が家庭で婦人の手で染色されていました、婦人達は木の実や樫の皮を集めたり、庭に大青を栽培したりして、めいめい独自の染料をつくりました。一人の婦人は——つまり父の農園を経営したサウス・カロライナのエリザ・ルーカス・ピンクニーのことですが——インヂゴの栽培をこの国に弘めました。

たとえそれがどんなに美しいものであつても、染色業が家内工業にとどまる限りは色も模様も限られています。繊維製品が工場で製造されるようになつて初めて、天日の下にあるあらゆる色合、あらゆる模様を染め出すことが可能になりました。今では色や模様にも流行が問題となつています。

染色、捺染、漂白及びその他の繊維製品仕上げは一八七〇年に既にれつきとした工業として確立していました。その時には千三百、割合にして全工員の七分の一に当る女子工員がいました。その後女子工員の人数と、全工員中に占める割合とは、シーソーのように一方が上れば一方が下がるという推移を辿り、一九四〇年には今迄最高の七千という数に達しましたが、全工員中の割合は八分の一に過ぎませんでした。

被服製造工

独立戦争当時の女性の最も大切な仕事の一つは、家庭で家族全員の着る物をこしらえることでした。一九四〇年には七五万の婦人が工場でその仕事をしています。（一九四七年には八〇万）

このような変化が起つたのは、一八四六年に裁縫ミシンが発明されたこと、南北戦争の兵士の軍服をつくるために標準寸法が発達したことが大きな理由です。

一八三〇年には港の水兵の服をつくることだけに限られていた被服業は、一八七〇年には「アメリカにおける男子人口の大部分は既製服につつまれている」という程に発達しました。

外套類は、植民地時代には仕立屋の手で仕立てられていましたが、一八七〇年には婦人の衣服中一番先に工場でつくられるようになりました。一九〇〇年迄にはスーツ、肌着、ブラウスのようなもの

も工場で生産されるようになりました。

どの製造業よりも婦人の手に一番多く残つているのはこの被服業です。一九四〇年の製造工業中、婦人労働者の数は被服業が一番多く七五万人です。一八七〇年以来平均してそうであつたように、女子は男子を三対一と凌いでいます。時には四対一になつたこともありますが、裁断、プレス、仮縫の仕事に男子が向けられたり、移民の波にまさつで腕のいい男子職人が入つて来た時には三対一の優位をおびやかされたこともあります。けれども一般に男子は、実際の裁縫よりも更に重要な、ミシンの上で布をたくみに操作する器用さの点で女子に劣つていますので、結局全アメリカの家庭の人人に着物を着せる仕事は大部分婦人の手で行われているといつてよいと思います。

装飾品製造工

被服労働者の中には装飾品、婦人子供服、男子服の三つの部門があります。

一九一〇年から女子の装飾品製造工の数をみますと、その増加率はどんどん大きくなつています。男女全工員中に占める率を取つても、一九一〇年の五分の三から一九四〇年の五分の四にふえています。一九四〇年の数は五五万人でした。（一九四七年には八〇万。）

婦人子供服製造工

一九一〇年から一九四〇年の間に、女子の装飾品附属品工はふえましたが、その分だけ技術的裁縫工の数はへりました。つまり三五万の女子装飾品附属品工がふえる一方、婦人子供服をつくる人人が四〇万人も離職しているのです。

婦人子供服製造はそれ迄婦人の独占的職業でした。装飾品工場では服の仕上げをする仕事の一部は男子によつて行われています。ですから三〇年間に経済的圧力のため、婦人は「婦人の職業」から男女双方の働く職場へ押し出されたわけです。

けれども婦人がドレスメーキングを離れる率は、三〇年間の後期においては初期ほど甚しくなくなつていますから、問題はやや緩和しているということが云えましょう。

男子服製造工

男子服製造は更に高い技術を要する職業です。国勢調査では男子服製造者を特殊技能者の中に分類しています。男子服をつくる婦人は被服製造工場、洋服店、洋品店、百貨店等に働いていますが、やはり一九一〇年から一九四〇年迄の間に次第に地位を失いつつあります。ドレスメーカーの場合の如

く急速にではありませんが、男子服製造者は始めから少數である上、減少率が激しくなる傾向にあります。男女ひつくるめて男子服製造職はだんだん重要性を失いつつありますが、女子の減少は男子よりも甚しくなつています。

帽子製造工

昔この国の帽子屋は、手でつくつたフェルト帽や麦わら帽を商売にしておりました。（布製帽子や婦人帽子はここには含みません。）一七八九年にマサチューセッツ州の一少女が牧場の草を晒してボンネットに編むことを考え出しました。

フェルト帽製造業の歴史はもつと古く、手造りのシルクハットを使つた植民地時代初期の頃迄さかのぼることができます。フェルト帽をつくる機械は一八四〇年を待つて初めて現れました。

一八七〇年には帽子製造工の三分の一に当る五千人の女子工員がいます。一九一〇年には一万四千に達しましたが、その後は又減少し、一九四〇年には一八七〇年とほぼ同じ数になりました。

木製品製造工

婦人が家庭で古い木製品を修繕し、更生している能力を見ながら、私達は女の木製品製造工というものをちよつと考えません。たしかに一八七〇年には女子の木製品製造工の数は微微たるものでした。けれどもその後一〇年毎の国勢調査の度にその数は増大し、殊に一九一〇年及び一九二〇年には飛躍的に増加しています。婦人が思いがけない職場に進出するのは戦争につきものの現象ですが、一九二〇年の少し前に女子木製品製造工の数が急激に増加したのも第一次世界大戦がその一因でありましょう。

一九四〇年に木工業に従事している三万二千人の婦人のうち、半分以上は洗濯ばさみ、マッチ、箒、木箱のように、女子でも楽に扱える軽くて小さな規格品をつくつています。家具製造工もかなりの割合――約五分の二近く――を占めています。そして一〇分の一が製材所（といつても製材工としてでなく）に働いています。実際に鋸機で製材しているのは百分の一にすぎません。

家具の製造は既に一八四〇年頃から家具店から工場に移行していましたが、仕事が機械化され特殊化されるまでは女子のための職場は開けませんでした。一九四〇年には一万二千人近い婦人が家具工場に働くようになりました。けれども大部分――全部ではありませんが――は縫製、組立、磨上げのような仕事をしています。

製紙工

良質の紙は今でもそうですが、紙は前には屑布からつくられ、それもアメリカでは一八二七年まで手ですかれていました。一八二七年に初めて機械が輸入されました。それから四〇年の後に、紙の原料として木からセルローズを抽出する方法が発見され、機械とパルプとは相携えて安価な紙を市場に送り出すようになりました。そして紙はずつと広く、ずつと多くの目的のために使われるようになりました。

例えば一九〇〇年のちよつと前頃に、紙箱製造業が非常に盛になりました。それ以前には買つた品物は紙袋に入れて渡されたものです。ところが誰かが品物を一つ一つ箱に入れて売ることを始めるとそれが大流行となり、安価な紙箱が大量に要求されるようになりました。かくて紙箱を安く生産する機械が発明され、紙箱製造業は今日の隆盛を見るに至りました。

製紙、製箱業が盛になり、機械が改良されるに従つて、婦人はどんどん工場に流れ込みました。一八七〇年以後は一〇年毎に平均七千人の婦人が増加しています。その全工員中に占める割合は一八七〇年の三分の一から、一八九〇年、一九〇〇年の二分の一に上昇しましたが、一九四〇年には実数は一八七〇年の六千から五万六千にふえているのに、割合は四分の一に落ちています。（一九四七年には九万。）

紙工業は大体三つの部門に分れます。パルプ、紙、板紙の製造工業が一部門、ボール箱、紙製容器の製造工業が一部門、「その他の紙製品」パルプ製品」製造工業が一部門です。婦人は主に第一、第二の部門に集り、封筒、カード、荷札、紙袋、その他の趣好品をつくる第三の部門にはそうたくさんはおりません。

印刷／製本工

一九四〇年には約四万三千人の婦人が、植字室で活字を組んだり、印刷室で印刷機に紙を入れたりその他製本工場の機械運転や事務に従事しています。（一九四七年には一〇万近くになりました。）

植字工の仕事は非常な熟練を要するもので、六年も年期を入れなければ一人前になれません。一九四〇年にはこの六年の年期を入れた婦人は約八千人おりましたが、一九一〇年には更に多く一万四千人近くありました。

現代は機械の時代と呼ばれると共に、紙の時代とも呼ばれる程莫大な量の印刷物をつくり出してい

ますが、少くとも一九四〇年に至る迄は、植字工の数は男女共減つて来ています。殊に女子の場合が著しく、一九一〇年には全工員の一〇分の一であつたのが、一九四〇年には二〇分の一になりました。

一九四〇年には、印刷出版業に従事する婦人のうち、植字工は五分の一に足りません。女子の印刷工、電気製版工、ステレオ製版工、彫刻製版工、写真版製造工、石版製造工等は更に僅少です。

印刷製本業に働く四万三千人の婦人労働者の四分の三を上廻る大多数の婦人は「機械操作工又は補助作業員」で、一九四〇年にはその多くが製本部門におります。製本部門の従業者は、非常に複雑な機械を操作する綴機工を除けば大抵婦人です。その仕事は半技能的なもので約一年間の見習期間を要します。

仕事の中には折工、縫工、張込工、突揃工の如く手でする仕事もあれば、縫機工、背綴補強工の如く小さな機械を使う仕事もあります。

化学薬品製造工

婦人は種種の化学工業に働いています。それは少しも新しいことではなく、南北戦争以前から「染料釜、灰汁槽、ろうそく型の三つは行きとどいた農家になくてはならぬお道具立てでした。」婦人は昔から手づくりの染料をつくつていましたし、前にも申しましたように染料が最も重要な化学薬品であつた一八六〇年頃には、一婦人がインヂゴを栽培し、それを売つて化学工業の発展に一役買いました。その頃には少量ながら酸、塩、軟膏、医薬も生産されるようになりました。けれども化学工業が大発展を遂げたのは第一次大戦の二〇年位前からで、この頃始めて新しい生産方法が発見され、副産物も利用されるようになりました。

一八七〇年には五百に満たなかつた女子労働者の数は、一九四〇年には三万八千になりました。（一九四七年には一〇万を超えると算定されています。）大部分は石けん、ろうそく、染料、テレピン油、セルロイド、花火、フューズ、弾薬、薬品等の製造部門に働く人人です。又人絹製品及びそれに類する製品の部門に働く婦人も相当の数にのぼりますが、ペイント、ワニスや、精油、石油又はコールタール製品部門に働く婦人は僅かです。婦人のための職場は主として軽作業、殊に仕上げ、包装の部門です。

一九四〇年には、化学工業に働く婦人は全工業に働く婦人一〇人に対し一人の割合です。（一九四七年には一〇人に二人。）

ゴム製品製造工

ゴム靴と自動車のタイヤは、ゴム工業に数多の婦人の職場を拓いてくれました。その結果これに従業する婦人の数は一八七〇年の二千から、一九四〇年の二万六千、一九四七年の五万二千（推定）と上昇しました。ゴム靴やタイヤができるようになったのは、コネティカット州、ニューヘィヴンのチャールス、グッドイィーが長年の心痛と頭痛と町民の嘲笑に耐えつつ、生ゴムを硫黄と共に熱処理して、暑さにも溶けず型を保ち、寒さにもひびの入らぬ弾力性を保たせる方法を発見した一八三九年以後のことです。生ゴムを初めてつくつたのは南米、中米のインディアンで、コロンブスの米大陸発見よりもずつと前から、ボール、靴、壺をつくつたり、体に鳥の羽をつけるのに用いたりしていました。

まだ自動車の時代の来ない一九一〇年以前には、ゴムの主な使い途はオーバーシューズその他のはき物類でした。その頃にはゴム労働者中に占める婦人の割合は三分の一乃至二分の一でしたが、一九一〇年から一九二〇年までの一〇年間にそれ迄四〇年間にふえたよりもなお多くの女子工員がゴム工業に入つて来ました。

ゴム工業が一九二〇年以来急激な機械化を遂げたため、今なお女子の職場はふえつつあります。多くの婦人がチューブ製造や、ゴム靴製造に従事していますが、婦人はその器用さのために特に小型のゴム製品製造部門で求められております。又ゴム工業全体を通じては、仕上げ、検査、包装の部門に働いています。

一九二〇年以来男子労働者の数は幾分減りましたが、婦人の数は僅かながらふえていますから、婦人の雇用機会は増大していると云えるでしょう。

製靴工

一七〇〇年代の終り頃から、婦人は――そして子供も――家庭で靴の上部を縫つたり、とじたりする仕事をして、製靴業に重要な役割を果すようになりました。一八五〇年頃に初めて労力を節約する機械――その最も主要なものは縫機です――が輸入され、婦人は工場に入つて行きました。

一八七〇年迄に製靴工業は相当に大きくなり一万の婦人が雇われるようになりましたが、男子に比べれば女子の数は遥かに少く、男子一九人に対し女子一人の割合でした。女子の仕事はやはり靴の上部を縫う仕事でした。一九〇〇年頃からは他の諸種の部門にも入つて行きましたが、女子の主な仕事は依然として同じ仕事でした。

一九〇〇年には製靴はもう高度の技能を要する仕事ではなく、完全な機械作業となつていました。それから一〇年の間に今迄に最も大量の婦人が製靴工場や修繕工場に流れ込みました。その後も女子

工員は数も比率もどんどん上昇し、一九四〇年には実数にして一〇万二千、割合にして三人に一人が女子となりました。

製皮工

一八九〇年代には皮革製造に従事して、なめし、調整、仕上げをする女子労働者は三百人もいませんでした。次の一〇年間には機械の改良にともない、女子は男子に代つて雇われるようになりましたがそれでも皮革工業が女子の有望な職場となるまでにはいきませんでした。一九四〇年になつても女子の数は四千五百人に過ぎず、数の上で相当ましたとはいえ、全工員の一〇分の一に過ぎません。（一九四七年には八分の一。）

一九四〇年にはポケットブック、トランク、皮手袋、グローブ、ミット等の皮製品をつくる女子工員数は、なめし皮をつくる女子工員の五倍になつています。難う仕事を殆ど女子が担当しているのです。皮製品をつくつている女子工員の数は合計二万五千で、全工員中半分近くを占めています。

硝子工

初期の硝子工業を考える時、私達は熔鉱炉のそばで行う型吹工の巧みな、手に汗を握るような仕事ぶりを思い起します。このような硝子吹工は一九〇〇年迄硝子工業のシンボルでした。そしてやはり熔鉱炉のそばで働く模型工や圧搾工の仕事と共に「男の仕事」と思われていました。婦人は硝子に「彩色する」仕事には一八三二年からたずさわつていましたが、それ以外には補助的な作業や、仕上げ、検査包装が婦人の分野でした。一八七〇年から一九〇〇年迄に女子工員の数は一八〇人から二千七百人にふえただけです。

第一次大戦中に流れ作業が硝子工業に導入され、機械化が進むにつれて、硝子吹工の技術のようなものはもはや重要さを失い、あらゆる作業に必要な労働者の数は減少しました。一九二〇年以後には三種類の硝子製品――容器、建物や自動車の窓硝子、食器類――はますます大量に使われたにもかかわらず、男女硝子工の数は減りました。けれども女子の占める比率は上昇しましたから、女子の減り方は男子程甚しくはなかつたわけです。びんや果物鉢のような硝子器は大量につくられますが、個個の型吹工の技術は必要でなく、新しい自動装置によつて硝子型に圧搾空気を吹き込み、運搬ベルトの上に送ります。硝子型は運搬機によつて炉の中に運び込まれ、ここで強く熱せられた後、徐徐に冷却されます。最後に焼上つた器を運搬機から取り下し、検査し、包装するのが婦人の仕事です。

光学用、科学用硝子製品が造られるようになつてから、婦人の雇用機会は増大しました。

安全硝子ができるようになり、殊に一九三〇年に安全硝子以外のものを自動車に使用することが禁じられてから、婦人の雇用機会はますますふえ、一九四〇年には二万四千の婦人が硝子工業に働くようになりました。比率も一八七〇年には五〇人に一人であつたのが、五人に一人となりました。（一九四七年には四人に一人。）

陶　器　工

陶器工は私達が台所や食卓で用いる陶磁器、無数の種類の花びんや飾物をつくる人人です。婦人は昔からこの仕事にたずさわつていましたが、一八七〇年にはほんの僅か――百人ちようとしかいませんでした。けれども一九四〇年には一万人に達しました。

一般に不快と危険を伴う重労働には婦人はあまり雇われないのですが、陶器工は例外で、釉薬に鉛を使つたり、砂の微粒子を吸い込んだり、硅肺になる危険を伴つたりするのに女子が多く雇われ、一九四〇年には一万人の女子が硝子工業に働いています。けれども女子が本格的にこの部門に進出してからは大分労働条件の改善が行われました。

アメリカと同じく、ヨーロッパでも女子は仕上げ作業――装飾、色揚げ、研磨、つやだし――に従事していて、焼付の部門には、小さな陶磁器の焼付にたずさわつている人が少数あるだけです。第一次大戦中私達はヨーロッパ市場からの陶磁器供給を断たれましたが、そのために国内陶磁器工業は活況を呈し、婦人もこの仕事にほんとうに「所属」するようになりました。一九四〇年には女子は全工員の約三分の一です。（一九四七年には三分の一以上、五分の二近くなつています。）

建築用土石品製造工

一八七〇年には、煉瓦、タイル、陶瓦をつくる労働者の中に婦人は僅か八〇人含まれているだけです。それ以後も婦人労働者の数が二千人を超えたことは一度もありません。扱う材料が重いので婦人には向かないのでしよう。一九四〇年には全工員二五人に対し女子は一人の割です。

金属製品製造工

婦人の金属工業労働者は第一次大戦で急増し、一九四〇年には一三万七千人になりました。（第二次大戦にもうなぎ上りに増加し、一九四七年には四〇万人を数えました。）このように数から云えば

多いのですが、それでもこの大きな産業部門においては、ほんの小さな足場を持つに過ぎません。金属工業は仕事の仕方によつて大体四つのグループ、即ち時計、宝飾細工、銀製品の部門、鉄鋼製品の部門、機械器具の部門、自動車製造の部門に分けられます。

婦人の進出を長い眼で見ると、（一八七〇年の五千人、二五人に一人から、一九四〇年には二五人に二人となつた）金属工業自体の内部的変化によるところが多いようです。特定の作業のための機械、幾つかの作業を同時に行う機械が次次に発明され、機械の型や性能は改良され、注油は自動装置で行われるようになり、合金ができたため刃物の刃はいよいよ鋭く硬くなり、組立作業は分業化して、工員の作業は単純反復作業となり、起重機ができて女子でも重い物を動かすことがたやすくなるなど、諸種の変化のために、技能者はだんだんと必要でなくなり、半技能者が多く使われるようになりました。そして通常とのような発展形態が女子に進出の機会をひらいたのでした。

一九一〇年から一九二〇年の間に五万人の婦人が――他のどの一〇年間にふえたよりも大きな数です――金属工業に加わりました。第一次大戦のため、金属工業が非常な好景気にあつた時です。婦人は男子に置きかわつた許りでなく、多くの新しい職種につき、機械工場で機械を動かしたり、製品の検査をしたり、さまざまの手による作業に従事しました。組立部門にも入つて行きました。

不況期を含む次の一〇年間には金属工業の女子工員数は殆ど増加しておりません。けれども男女の比率も殆ど変化していませんから、女子許りでなく男子工員も増加しなかつたわけです。

一九四〇年には大多数の女子金属工員は――五分の三に少し足りない――鉄鋼その他の金属製品製造、機械器具製造（電気機械器具を除く）、輸送用設備製造（自動車を除く）の部門に働いています。この部門での女子の仕事はブリキの選出、検査等の重労働から鑵、せとひき容器、針金、刃物、金物類のような小さな器物製造に迄及んでいます。

一九四〇年には五分の一以上の女子工員が自動車及び自動車部品製造業に働いています。自動車が使われ出した当時にはごく僅かでしたが、一九一〇年から一九二〇年迄の自動車工業勃興期に、女子工員の数も急激に増加しました。女子の仕事には重労働は少く、大部分は縫製等のいわゆる典型的な「婦人の仕事」でした。けれども第二次大戦中に自動車工場が航行機工場にきりかえられた時、婦人は「男の仕事」にふりむけられ、戦後再び自動車工場に切りかえられた後も、少くともある程度迄そのままの場所に留つています。（一九四七年にはこのような女子工員の数は一九四〇年当時の二倍をこえています。）

電気機械器具製造工

電機工業の歴史は、発明というものがいかに一つの新しい産業を発展させたか、否、一つの新しい生活様式を発展させたかを物語るものです。その歴史は一八四〇年代の電信の発明に始まります。一八七〇年には電話が、一八七〇年、八〇年代には発電機、アークライト、白熱電燈が、一九〇〇年代になつて無線電信電話とラジオが発明されました。このように新しい電気応用の方法が次次に発明されましたが、それらの発明は皆何等かの装置を要するものです。「機械の頭脳」の複雑な組織や、無線電信塔の連結線に連結する多くの電気装置は、一九四〇年に七万四千人の婦人に職を与えました。(一九四七年には二〇万人と算定されます。)

殊に電燈ができるようになつてから、婦人の雇用機会は増大しました。電燈器具の部分品は非常に小さく、デリケートな取扱いを要するからです。一九二〇年代にラジオ製造業が勃興すると、数多の組立や、検査の仕事が又婦人に与えられました。一九四〇年には電機工業労働者の五分の二を婦人が占め、その中には高度の技能者もたくさんおります。

果物、野菜の分類工、荷造工

曾ては新鮮な野菜は夏でなければ食べられないもの、新鮮な果物は近くの果樹園で実る時でなければ食べられないものときまつていました。オレンジはなかなか手に入らないものでしたし、亜熱帯産の果実は珍品でした。今では私達は一年中何時でも新鮮な野菜や果物を北や南の栽培地から手に入れることができます。

長距離を運ぶのですから荷造りはしつかりしなくてはなりません。又お客の機工合は種種雑多ですから果物や野菜もそれに従つて等級がつけられなければなりません。それには機敏さ、器用さや、傷物にしないための注意深い取扱いが必要です。

一九一〇年以来分類工、荷造工として働く婦人の数はどんどんふえ、一九四〇年には一万五千人——全体の五分の三——の婦人が働いています。仕事が季節的、一時的のものであるため、従業する婦人は近辺に住む人が多いようです。

第四章　サービス業に従事する婦人

私達の住んでいる近代社会には、事務の車輪を回転させるほう大なホワイト・カラーの大軍や、原料を採取して、私達の使う品物につくりあげる工業労働者の外に、過去には必要のなかつた仕事を私達のためにする人人、或は過去には私達が自分でしていたが、今は忙しくてできなくなつた仕事をしてくれる人が必要です。

私達の家の仕事をしてくれる人、病気の時に看病してくれる人、公共の建物、事務所、教会を清掃してくれる人、エレベーターを動かす人、ホテル、食堂、下宿、旅宿を掃除したり、食事を用意したりしてくれる人、私達の衣類を洗濯や染色してくれる人、美容院や理髪店で私達をきれいにしてくれる人、劇場等の娯楽場で、切符をきり、席に案内してくれる人、こういう人人がいなかつたら私達の近代生活はめちやめちやになつてしまうでしよう。私達のためにこの種の仕事を行つている婦人は一九四〇年に三七〇万人からいます。そしてこれが全産業中一番多くの婦人労働者を抱えている部門です。

家事サービス従業者

一九四〇年のサービス従業者中四分の三は、個人の家庭で、或はホテル、食堂、オフィスその他の「公共的」建物で家事を行う人人です。

けれども婦人は次第にこの職業を好まなくなるようです。一八七〇年には全婦人労働者の殆ど半ばを占めていた家事労働者が、一九四〇年には約五分の一に減りました。第一次大戦のため、戦争に緊急必要な部門に婦人が吸収されたからです。両大戦間の時期には、婦人は再び「家事」に帰えりましたが、それは不況時代に殆ど職業選択の自由がなかつたためと思われます。第二次大戦が始まると婦人は又もやよりよい労働条件と国に奉仕する機会を求めて家事を去りました。

一八七〇年から一九四〇年迄の間に「家事」の部門で婦人は男子に幾分席をゆずり、五〇人中四三人であつたものが、五〇人中三九人に減少しました。又個人の家庭に働く家事労働者の数が減つて、公共の場所で働く婦人がふえる傾向があります。恐らくこれには、㈠　婦人自身が個人の家より公共の場所を好む　㈡　人人が家で人を雇うよりも、洗濯屋、ホテル、食堂等を利用するようになつた、という二つの理由があるように思われます。公共の場所が好まれるのも不思議はありません。一般的

に云つて公共の場所の方が労働条件、時間、給料の点で幾分恵まれていますし、従業者が労働法、労働者補償法、社会保障法によつて、個人の家庭の家事労働者の受けない保護を受けられるからです。

個人の家庭で働く家事労働者の長時間、低賃金、悪労働条件はひどいものです。工場、事務所、商店等に他の働き口がある場合には、好きこのんで低賃金、悪条件のところへ行く人はありません。又移民の数が減少したことも、喜んで家事労働につく人の数がへつた原因の一つでしよう。しかし数が少くなつたために、家事労働者はいくらかましな賃金——多くの人人はこれすら払い切れないと感じたのですが——を要求し、又受けることができるようになりました。

一方家事労働者に対する需要もそれ程致命的ではなくなりました。その一因は家事のきりもりが簡単になつたことです。家族が次第に小さくなり、その住む家やアパートも小さくなつたほか、家庭の機械化、電化で家事がずつと楽になりました。人人が外で食事をする機会もだんだん多くなつています。

けれど何といつても家事労働者の不足には方方の家庭が困つています。アメリカとカナダは、イギリスやスカンジナビア諸国の例にならつて、現在家事労働が嫌われている欠陥を是正するために労働の基準を定めようと努力しています。もしこの努力が効を奏せば、人手の足りない家庭や、小さい子供の多い家庭はずい分助かることでしよう。等しい条件さえ与えられれば、商店、事務所、工場の仕事よりは家庭的な仕事を好む婦人はたくさんいるのですから……。

洗濯業従業者

女子の洗濯業従業者は近年二つの矛盾する趨勢に行き当つています。一つは雇用の機会を増すものであり、もう一つはそれを減らすものです。即ち一方では洗濯は、他の家庭内の仕事と共に、商工業の手に、——特に安い値段で高度のサービスを行う工場に移行し、そのため多くの労働者を雇う必要が生じましたが、他方では実用的で能率的な家庭用洗濯機が売出されたため、多くの婦人——殊に洗濯屋の洗濯を好まない婦人達は家庭で洗濯をすることが多くなりました。

この両者の競争では、家庭用洗濯機がまずまず勝を制しているようです。一九四〇年には四〇万人の女子洗濯業従業者がいて一八七〇年の七倍となつていますが、一九一〇年に比べれば二〇万人減少しています。やはり戦争と不景気が、家事労働者に及ぼしたと同じ影響を洗濯業従業者にも及ぼしたのです。

いい洗濯機械が家庭に備えつけられるようになつたのに洗濯女は家庭の仕事を捨てて出て行きまし

た。というよりは、洗濯女が出て行く迄は洗濯機が買入れられなかつたという方が当つているかも知れません。ともかく一九四〇年には一九三〇年に比べて、個人の家庭に雇われて働く洗濯女の数は一五万人も減つています。そして洗濯業者に雇われる洗濯女の数は一万人ふえています。

家庭に雇われて洗濯をするのは殆どすべて婦人でしたが、洗濯業者に雇われて働くのは、婦人が多数を占めるとはいうものの、男子もおります。個人の家庭の洗濯女をも含め、洗濯、クリーニング、染色をあわせた全従業者中、婦人は一八七〇年には一〇人に九人でしたが、一九四〇年には一〇人に七人となりました。男子へのきりかえが一番多く行われたのは一九二〇年を過ぎた頃で、家庭から外へ出す洗濯物が山とふえて、時には婦人には扱い切れなくなつたためです。

美容師、理髪師、美爪師

一九二〇年頃、髪を断髪にした婦人は、婦人の職業のために思いがけない働きをしているのです。つまり彼女達は全米をふうびした流行の口火を切り、婦人に無数の職場を拓いたのでした。初めて断髪に当つたのは理髪師でしたが、程なく髪をウェーブすることがはやり出し、それから次第にいろいろな「美容術」が盛になりました。そして美容院が開後のたけのこのように生れ出ました。

一九二〇年から一九四〇年の間に新しく美容師、理髪師、又は美爪師になつた婦人の数は一八万五千人で、これでアメリカの婦人を美しく磨きあげる婦人奉仕者は合計二二万八千人となりました。むろん男子理髪店で美爪術をやつている婦人もありますが、その代り男子で婦人のための美容院で理髪調髪をやつている人もあります。この人人のサービスを受けておめかしをするのは婦人よりも男子の方が多いようです。何故なら、一九四〇年中は、美容師、理髪師、美爪師の中、婦人——主に婦人客にサービスしている——は半分以下なのに、男子——主に男子客にサービスしている——は半分を超えているからです。もつと正確に云えば、一九四〇年、アメリカには二九八人の男子に対して一人の男子の美容師、理髪師、又は美爪師がおりますが、婦人の場合には三〇一人に対して一人の婦人の美容師、理髪師、美爪師がいるという割合になつています。

しかし一八七〇年には男子は婦人に比べてもつともつと恵まれていました。美容、理容を業とする人々の中男子は一〇分の九迄を占め、婦人は僅か一〇分の一に過ぎなかつたのです。

一九四〇年には婦人美容師の量をおびやかす事が起りました。それは婦人達が家庭で、自分の手で安価にパーマネントをほどこす方法が考案されたことです。こうすれば美容院でやつてもらう何分の一の費用で済みます。今のところそれが美容師の仕事にどの程度の打撃を与えるかは明言できません。多くの婦人が美容院を利用することをやめましたが、同様多くの婦人は今後も美容師のお世話に

なることを決してやめないでしよう。」

派出婦助産婦

一九四〇年には一〇万四千人の派出婦及び助産婦がおりますが、その中どちらがどれだけいるかは明かでありません。兼業の人も多いでしよう。近頃では赤ちやんは病院で、又は少くとも医師の手をかりて生まれるようになつて来ましたが、それでもアメリカにはまだ病院や医師に恵まれない土地がたくさんありますし、都会でも経済的にそれが不可能な人人がたくさんいます。ですから助産婦は依然としてひつぱりだこですし、派出婦もあらゆるところで求められています。

一九四〇年には一八七〇年当時の一〇倍の派出婦、助産婦がいますが、一九三〇年に比べれば三万七千人許り減少しています。これは教育を受けて高級看護婦になる人が多くなつたためで、同時に重病人は家庭で派出婦の看護を受けるよりも、病院で教育された看護婦の手当てを受けるようになつて来ています。

家庭の派出婦であると、病院の看護婦であるとを問わず、看護の仕事は殆ど常に婦人の仕事になつています。一八七〇年から一九四〇年迄の七〇年間に亘つて、看護の仕事にたずさわつているのは一

〇分の九迄婦人でした。

私達がお世話になる派出婦、助産婦は比較的年輩の婦人が多いようです。一九四〇年には半分以上が四五才以上で、二五才以下の人は八分の一に過ぎません。

エレベーター係

一九〇〇年の国勢調査で初めて女子のエレベーター係の数が報告されました。それは三〇人という数でしたが、一〇年後の調査では更に五人減つていました。次いで第一次大戦がやつて来て、女子は男子に替つて進出し、戦争が済んで大勢の男子が職場に帰えつた後も、女子はこの職種に適していることが認められたために続けて雇われるようになりました。一九四〇年には一万四千人の婦人がエレベーターを動かしています。エレベーター係はまさに、戦争中女子が導入され、戦後も続けて留ることのできた仕事の代表的なものです。

掃除人

無数のアパート、巨大なビルディング、多くの教会を持つ都会生活がどんなに膨脹して来たかは、一九四〇年に三七万八千人の掃除人がいるのを見れば分ります。その中一〇分の一は婦人です。一九一〇年頃には一時五分の一が婦人だったこともあります。従つて婦人をも含む掃除人の数はどんどん増加しつつありますが、雇用の機会は婦人よりも男子に多く開かれているわけです。

娯楽、厚生施設従業者

この項目の中には、球突屋のゲーム取りから、舞台の道具方、ゴルフ場の球拾い、劇場の案内係に至るまでの種種の仕事が含まれています。けれども婦人の従業者はあまり多くありません。舞台の道具方を始め婦人には重すぎる労働や、球突場のゲーム取りや、劇場の案内係のように若い女子には好ましくないと考えられる職種が幾つかあるからです。けれども一八七〇年に八七人であつた婦人従業者は一九三〇年には三千六百人になりました。そして次の一〇年間には商業的娯楽施設が非常に発展したため、一九四〇年迄に娯楽厚生施設に働く婦人の数は一万二千となり、全従業者中七分の一を占めました。

下宿貸間業者

家族を持たない労働者が家を持たねばならない場合、しかもそれに高い家賃を払うことができない場合に、解決策として下宿と貸間とがあります。都市が急速な発展を遂げ、建築業が躍進し、工場が活気を呈した時には、労働者は自分の家を離れて、仕事のある処に集まりました。そしてそこに再び自分の家庭を築くまでは下宿屋や貸間屋の世話にならなければなりませんでした。特に戦争が始まつて労働者が軍需産業に集められた時には、家を離れて来たそれらの人人のために安い住家が必要となりました。

一八七〇年には七千人の婦人が下宿屋、貸間屋を経営してその要求を充していましたが、一九四〇年にはその数は一〇万一千人になつていました。けれども一九四〇年は一九一〇年に比べれば数千人少くなつています。これは都市が膨脹を続けるに従つて、「小さな、親しい、家庭的な」下宿が純商業的なアパートやレストラントに地歩を譲つたためと思われます。

けれどもアパートやレストラントよりは家庭的な下宿を好む人も依然として少くないので、下宿、貸間の経営はまだ婦人に仕事の機会を提供しています。下宿、貸間の経営者全体から見て、婦人の占

める割合は一八七〇年には半ばをやや上回る程度でしたが、一九四〇年には一〇分の九に達しています。

第五章　専門的職業に従事する婦人

専門的職業に従事する人人は、工業労働者のように物をつくることもせず、事務的職業に働く人のように物を売つたり配布したりすることもしませんが、やはり自己の労働力を売る人人です。只違う点は、その労働力が長い期間の専門教育を経て修得された高度の技能を備えていることです。

一八七〇年には九万四千人の専門的職業に従事する婦人がおりましたが、この頃の婦人には教師以外の専門的職業を選ぶ自由は殆どなく、一〇分の九迄が学校の先生でした。その他の専門的職業には五千人或はそれ以下――殆どがそれ以下――の婦人が働いていました。看護婦が約千人、建築家が一人で、化学者、工学者、獣医、図書館補助員（図書館員は四三人いましたが）は一人もいませんでした。

先生や看護婦となつた婦人は、家庭での子供の教育や、病人の看護から自然に継続している仕事をしているわけです。社会的、経済的事情の発展にともなつて新しい専門的職業が生れた時、婦人はその中にも進出しました。けれども法学、医学、神学のような伝統的な職業は何時迄も頑強に婦人を受

入れることを拒み続けました。

高等教育への門は一八五〇年頃女子にも開かれました。年と共にその機会はだんだん広く開かれ、女子はそれを十分に利用しました。そして一九四〇年には約一五〇万の婦人が専門的職業に従事するようになりました。その中半分以上は依然として教師であり、四分の一が看護婦ですが、今では特に婦人に対して閉されている専門的職業は一つもありません。

教　師

専門的職業のうち、つまり婦人が専門的職業にともかく受入れられるようになつてこの方、一番多く進出の機会を見出して来た職業は常に教師でした。現在でもそれには変りありません。必ずしもすべての国で、婦人が教職についているとか、教職の大部分を婦人が占めているとかいうのではありませんが、現在のアメリカでは教職の大部分は婦人によつて占められています。アメリカでも過去においてはそうではありませんでした。植民地時代或は合衆国以前の若いアメリカでは、男子の「教僧」が唯一の子供の教育者で、親はお金を払つてこれらの教僧の処に子供を通わせていました。大学では無論のこと男子だけが教授を行つていました。当時は高等教育はごく少数の者にしか与えられず、しかもその少数はすべて男子に限られていました。女子は、寛大な考を持つ家庭に恵まれた一部の者だけが、家庭教師から教育を受けるという状態でした。

けれども南北戦争の頃には、よい市民は啓発された市民であるという考えや、すべての親が子供の教育費を負担できるものではないから、教育は公費で行うべきであるという考えが、ようやく一般に浸透して来ました。そして一八五二年にマサチューセッツ州が義務教育法を採用したのを皮切りとし一九二〇年にミシシッピー州がこの法律を通過させたのを最後として、アメリカ全土に亘る義務教育制度が確立されたのです。

南北戦争よりも約二〇年程前から、女子のために設立され始めた高等学校、師範学校、その他は、教員となり得る女子を送り出していました。次いで五年に亘る南北戦争で男手が不足した時に、これらの婦人は男子に代つて教職に進出し、りつぱに務めを果しました。

アメリカの教師が大部分婦人であるということについては、公立学校制度が発達しつつある時に丁度南北戦争がやつて来たのがその理由だという人もあります。その他にも南北戦争以前に芽生えている幾つかの原因があるようです。第一に婦人自身が教育を受けて、教師になる機会を求めていたこと、第二に婦人は高い人格をも含めて、教師としての資質に恵まれているという考えが増大して来たこと、婦人は男子よりも教職に長く留まる見込があること、そして何よりもまず男子より安く雇えた

こと等がその理由といえましょう。

一八七〇年には八万五千近い女子教員がいて、全教員の三分の二を占めていました。以後一〇年毎に一〇万以上の婦人が教職につき、一九四〇年にはその数は八二万二千を超えました。

一九二〇年迄は婦人は男子に代つて進出しつづけ、一時は五人に四人という比率を示しました。けれども一九二〇年から一九三〇年の間に、多くの男子が教職に流れ込み、次の一〇年間にも同じ状態がつづきましたので、一九四〇年には、一九二〇年の一〇人に八人に比べ、一〇人に七人と下落しました。一九三〇年から一九四〇年の間には、実数においても五万人から減少しています。

しかしともかく、普通教育においては女子教員は男子教員に対し圧倒的優位を占めていますが、大学教育においてはそうではありません。「大学の学長、教授及び講師」に婦人の占める割合は三分の一に達したことは一度もありません。しかも一九三〇年以後はその比率も落ちています。事実一九四〇年には教職にある婦人中、大学教授のレベルに達していた婦人は百人に三人もありません。

四〇年前の女の先生に比べると今の女の先生は平均年令が高く、しかも既婚者が多いようです。昔では結婚した婦人は教師としての資格を或程度欠くと考えられた時もありましたが、近頃はだんだん結婚している婦人の方がよりよい先生となり得るという考えが強まつて来ました。ともかく一九四〇年には女子教員の殆ど四分の一近くが既婚者です。

どなたも御存知のように、今は先生の数が非常に不足しています。他のサービス職業従事者と同じく、戦争中に多くの人人が教職から他の職業へ移りかわり、新しい職業の方がましであることを見出しました。しかもその間学童の数はいやが上にも増加したのです。教職の口はこと当分の間余っていると見てよいでしょう。

高級看護婦

看護婦の仕事がどんなに重要性を持つようになったかは、一八七〇年の看護婦の推定数千人と、一九四〇年の三六万三千人との開きを見れば一目瞭然です。一九〇〇年迄は高級看護婦も、派出婦も、助産婦と共に「看護婦及び助産婦」として十把一からげに扱われ、国勢調査では家事従業者、私的サービス従事者の項目に並べられていました。看護婦は年を経るに従つて専門的職業に発展して行つた職業の一つです。

看護業の近代的水準は南北戦争以来発達したものです。この時以来看護の学校が設けられ、学校も病院も改善をつづけました。そして看護婦の受ける教育と、その修得した技能とが、彼女達を「専門的職業」の地位に昇格させたのです。病院や診療所がどんどん設けられ、市町村や州や連邦政府の手

で保健サービスが行われるようになると、婦人はどんどんその方面に進出して、人人に直接奉仕したいという彼女達の願いを満すようになりました。低賃金、長時間労働、過度の緊張は長い間彼女達の意気をそそうさせて来ましたが、それも時と共に改善されました。

第一次大戦中に看護婦は極度の欠乏を来しました。戦後及び不景気時代には反対に看護婦が多すぎて困りました――というより社会の人人の支払能力以上に看護婦が余つていたのです。第二次大戦中には再び看護婦ききんに見舞われ、傷病兵病院を含む各種病院、精神病院、公共保健サービスの看護婦はいまだに不足しています。

看護における男子の貢献は婦人に比べれば微微たるものです。男子は看護業従事者中、一〇分の一に達したことは一度もなく、しかも一九二〇年以降は看護は殆ど全く婦人の仕事となりました。

、大まかに云つて看護婦の年齢は非常に若くもなく、老いてもいません。一九四〇年には四分の三が二〇才から四四才迄に分布していました。既婚者は五分の一に過ぎません。（全女子有業者についてみれば既婚者の割合は五分の二近くなつています）看護婦は病院に住み込まなければならないため或は個人的に雇われる看護婦でも家庭を離れてしかも長時間働かなければならないために、結婚生活と仕事を両立させて行くことが困難なのでしょう。

社会事業、福祉事業、宗教事業の従業者

社会事業、福祉事業、宗教事業（但し牧師を除く）も主に婦人の活動分野です。ひと頃まではこれらも準専門的職業と考えられていましたが、看護婦と同じく、社会、福祉事業は専門的職業に迄発展しました。労働力を省く新しい機械が発明されて失業者の大群が社会に放り出されるなど、産業革命がひき起したさまざまの不幸のために、労働者の家族問題を取扱う専門家の必要が痛感されるようになつたのです。大都市には大勢の人が群をなし、それでいてお互いに切離れて暮しています。田舎では事があると近隣の人人が来て助けてくれますが、都会ではそういうことがありません。そういう仕事を引受けたのが社会事業施設なのです。

やがて大学の社会事業学科や、独立の社会事業学校が設けられ、ここで教育された社会事業員は、他の専門的職業に従事する人人と同じく、特別の称号を受けるようになりました。社会事業に従事する婦人は、一般に男子よりも高い教育を受けています。一九四〇年には、婦人の社会事業員中優に半分以上が四年、乃至それ以上の大学教育を経ていますが、男子ではその割合は半分以下となつています。

社会事業、福祉事業、宗教事業は今なお婦人の進出しつつある分野です。一九四〇年には宗教事業従事者中（牧師を除く）四分の三が婦人であり、社会、福祉事業従事者中、三分の二が婦人です。一九一〇年には合計九千人の婦人がこの分野に働いていましたが、一九四〇年にはその数は七万四千人となり、割合も男女を含めた全従業者中の約半分から三分の二以上になりました。

音楽家、音楽教師

この分野における数の優位は、最初男子に、次に婦人に、そして再び男子にと移り変りました。昔は音楽は個人教授で教えられ、音楽家は大てい個人教授をしていました。そして他の教育の仕事と同じく音楽教授も男子の仕事となつていました。けれども一八七〇年には六千人の婦人がこの分野に入つて来て、全体の三分の一を占めるようになりました。そしてその後は他の教育の仕事と同じく音楽教師も婦人が多くなりました。一九一〇年には婦人の音楽家、及び音楽教師は八万四千人で全体の五分の三をなしています。

けれどもどういうわけか、その後は音楽教師の数が減つています。私達は音楽を劇場で、或は映画やラジオから聞く機会が非常に多くなりましたが、その場合の演奏者は大てい男子です。そして一九四〇年には婦人の音楽家及び音楽教師の数は六万六千人に下落し、割合も全体の五分の二になつてしまいました。

美術家、美術教師

美術家、美術教師は、音楽家、音楽教師よりも、婦人にとつて更に狭き門です。婦人の美術家、美術教師は一八七〇年の五百人足らずから、一九四〇年には二万一千人（音楽家、音楽教師の数の三分の一に満たない）になりましたが、この数は一九三〇年に比べれば幾分落ちています。割合としては一八七〇年の一〇分の一から、一八九〇年には二分の一に迄漕ぎつけましたが、一九四〇年には又三分の一に下つています。婦人の中に離職する人があれば、別の婦人がその後に就くほか、学校での美術科教授は学校の組織上専任の教師が行うのが通例となつたため、婦人が美術教師となる機会が多かつたわけですが、一般に美術家、美術教師の職は婦人に広い進出分野を約束しているとは云えないようです。

芸能人、スポーツ家及び関連従業者

婦人の芸能人は大部分女優、踊子、舞踏教師及びコーラスガールに属しています。（四分の一が女優、四分の二が舞踊関係）俳優、舞踊に属する男子は一〇分の一に過ぎません。しかしこの分野には他の職種――スポーツ家、ショーマン、スポーツの監督や世話人、映画の映写技師、劇場、映画館その他の娯楽、厚生施設の所有者、支配人、係員もあります。

この分野においても、婦人の進出は鈍つて来ているようです。一八七〇年の八百人から、一九三〇年には二万九千になりましたが、一九四〇年には二万八千と落ちています。割合にして全体の六分の一から五分の一へ、そして再び六分の一となつています。

この分野への婦人の進出は一九〇〇年以前の方がそれ以後におけるよりも急速に行われています。けれども第一次大戦中には非常な進出ぶりを見せているのは、戦争中には人人が平生よりも余計に娯楽を求めるからでありましょう。しかし音楽家、音楽教師、美術家、美術教師の場合と同じく、不景気は芸能人やスポーツ家達にも悪影響を及ぼしました。第二次大戦中には再びこの分野が活気を呈したことと思われます。

著述家

女流作家のリストをつくろうと思えば、既に一八七〇年以前にかなりの大きさのものをつくることができたでしょう。その中の何人かは、今日にもなおその名を知られています。婦人はずつと前から、小説や詩や料理全書のみならず、宗教や哲学に関する著作もしていました。既に一八五〇年代から「大雑誌」に寄稿もしていました。けれども一八七〇年の国勢調査では僅かに一一五名の婦人が著述家として数えられているに過ぎません。著述家として生活を立てている婦人は数える程しかなかつたわけです。今日でも作家は、どく成功している一部の人のほかは、教師とかジャーナリストとか家事とかを兼ねながら、その「余暇」を縫つてものを書いているのです。

一八七〇年には婦人作家の数は僅かでありましたが、全著述家の四分の一を占めていました。一九一〇年には二分の一近くを占める迄になりましたが、一九四〇年には再び三分の一に落ち、数からいつても一九三〇年よりは減つています。不景気が出版界にも悪影響を及ぼしたのです。しかし一九四〇年には約五千人の婦人作家がいて、その中多数の人が名声を博しています。何といつても著述は婦人が文句なしにその寄与を認められている芸術の一つと云えます。

図書館員

一八七〇年には図書館の数も少く、婦人の図書館員はたつた四三人しかいませんでした。これは全図書館員の五分の一に当つていました。それが一九四〇年には三万五千人になつたということは、アメリカの教育や文化の水準がいかに向上したかを示すものと云えます。人によつては、無料の公共図書館は無料の教育制度に匹敵する程の重要性を持つものだと評価する人があります。図書館は若い人でも年老いた人でも利用することができるからです。又若くして教育から離れなければならない多くの人人も、図書館で自己の教育を続けることができます。このようにして公共図書館は婦人に職業進出の機会を与えました。その機会は今もなお増大しつつあります。

図書館補助員

図書館補助員の仕事は専門的というよりはむしろ書記的な仕事です。一九三〇年頃迄はごく小さな職業分野でした。しかも三千人の婦人が働いていた一九一〇年に比べると、一九三〇年には更に小さくなつていました。ところが一九三〇年から一九四〇年の間にその数は千五百から一躍一万七千に増加しました。不景気時代に行われた公共救済事業がその最も大きな理由と思われます。

図書館員も、図書館補助員も主に婦人の仕事です。一九一〇年に図書館員並びに補助員中六分の五を占めていた婦人は、一九二〇年には半分ちよつと迄下りましたが、一九三〇年には再び四分の三に一九四〇年には五分の四に上昇しています。

編輯記者、探訪記者

文化程度の高い国民は無限の数と、無限の種類の書物、新聞、雑誌を求めます。婦人は一八五〇年以来高等教育を受ける機会を利用して来たおかげで、だんだんにこれらの書物、新聞、雑誌をつくる役割を演じられるようになりました。一八七〇年には婦人の編輯記者又は探訪記者は図書館員と同じ四三人という数でした。けれどもその数は急速且たゆみなく増加し、一九四〇年には一万六千人を数えるようになりました。男子記者の数もふえましたが、婦人記者の増加率は更に速かで、一八七〇年には全体の百分の一にも満たなかつたものが、一九四〇年には四分の一になりました。

学問的職業従事者

神学、法学、医学は、それよりも新しい職業を、それが真に専門的職業と呼ばれるに値するか否か

を計る物指として使われて来た、伝統的三大職業です。この由緒ある世界に婦人が進出するためには多くの、しかも強固な反対と戦わねばなりませんでしたが、ともかく婦人は一八五〇年頃から追追に、そのための教育を受けることができるようになりました。そして婦人は相当の進出を遂げました。

今や婦人が専門的職業につく十分の能力を持っていることは立証されました。そして「学問的職業」には多くの手ごたえある仕事が婦人をさし招いています。けれども婦人の学問的職業に対する興味は近頃幾分薄らいで来たかに見受けられます。

医師

アメリカで初めて医師の免状が一婦人に与えられたのは一八四九年でした。植民地時代には、病人の看護や、産婆は殆ど婦人の仕事でしたが、そのような仕事に婦人が再び参加しようという努力の第一歩がここに印されたのです。（植民地時代には医師は殆どいませんでした。）十九世紀の後半には多数の女子が医学を修めて、病院に働く機会を得るために非常な努力を傾けました。

一八七〇年に各種の内科医、外科医として働く婦人の数は五百人を超えました。一九四〇年には婦人の内科医、外科医、整骨医は八千八百人、背椎調整療法その他の療法に従事する婦人の数は一万二千近くになっています。以上合計数は一九三〇年に比べると約二百人減少していますが、一八七〇年には医学に従事する婦人は、男女を合せた全体に対し百人に一人でしたが、一九四〇年には二〇人に一人となりました。

もとよりこれは非常に大きな進歩です。医学にたずさわる婦人の数は一九三〇年から一九四〇年の間に幾分落ちてはいるものの、一八七〇年に比べれば三八倍の数に達しています。その上面白いことに、内科医、外科医の数だけを取るならば、一九三〇年から一九四〇年の間に九百人の増加が見られ、減っているのは整骨医が五百人、背椎調整療法その他の療法家が六百人となっていることです。

歯科医

歯科医も婦人の進出の機会ですが、婦人歯科医の数は減少しつつあります。一八七〇年の二五人から一九二〇年には二千人近く迄増加しましたが、一九四〇年には再び千人ちょっとに落ちました。

牧師

アメリカで初めて、一婦人が神学校のコースを修めて卒業したのは一八五一年のことでしたが、婦人が聖職にたずさわることに男子の牧師や司教会が反対を続けたために、婦人の牧師ははかばかしくふえませんでした。

一九一〇年以前の国勢調査では牧師は他の宗教、社会、福祉事業に従事する人人と一しょに数えられていました。一九一〇年の調査で初めて六八五人の婦人牧師を独立に数え出しました。その後は一年間に平均八五人づつ増加し、一九四〇年には三千三百人となりました。割合としては全牧師中二百人に一人から、二百人に五人となりましたが、そのふえ方は次第に鈍りつつあります。

神学校に入る婦人の数は牧師になる婦人の数よりは多いのですが、これは一般に、宗教教育の先生とか、宣教師や教会管理者になることをめざしている人が多いためです。

弁護士

いろいろの障害を打破して、婦人が法律の行使を職業とするのは非常に困難なことでした。一八七〇年以前には、法律を修めるには普通法律事務所に入って、法律を勉強する——つまり「法律文書を読む」のが常道でしたが、女子を喜んで雇い入れるような法律事務所はめったにありませんでした。

けれどもそれから三〇年の間に幾つもの法律学校が設けられたため、女子もその中の幾つかに入学して法律を修めることができるようになりました。

婦人の弁護士と裁判官の数は五百人から四千五百人に増加しました。数としては小さなものですがその増加率は注目すべきです。

牧師の場合と同様、法律を修めた婦人の多くは法律の行使そのものを業としているわけではなく、法律関係出版物の編輯者とか、商業、公務、その他の専門的職業で学んだことを生かしているのです。従って先に挙げた数字から、その中何人が学位を取っているか、或は何人が弁護士の資格を持っているかを知ることはできません。

弁護士、裁判官全体のうちに婦人の占める割合は、一九一〇年にも一九四〇年にも、牧師のそれと大体同じです。

科学及び工業に従事する専門家

科学者や技術者は産業界でますます重要性を加えつつあります。今日私達の利用する無数の生産物は、化学や物理の原理に基いてつくられるからです。これら無数の生産物に対し、製造工程の各所で

化学的、物理的検査を行わねばなりません。又今日の複雑な大規模生産制には工学者の技術的サービスや、デザイナー、製図者、技術者等の手助が必要です。大きなビルディングを建てるには、便利でしかも美的な設計をするためにも、安全で経済的な建築をするためにも、腕のいい建築家の助けが必要です。農業に科学的方法が導入されて獣医の職業もその影響をうけるようになりました。以上の各分野中、婦人の殆ど活躍していない分野もありますし、婦人が大いに活躍している分野もあります。

デザイナー、図案家

衣服、アクセサリー、織物のデザインは多数の婦人に職を与えました。一九四〇年には九千人の婦人デザイナーがいます。婦人の図案家はそれよりも少数ですが（一九四〇年に千五百人）第一次第二次の両大戦中に、婦人は従軍した男子に代つて図案家として進出しました。

一八七〇年には婦人のデザイナーと図案家は、両方を合計しても僅か一三人で、男女図案家全体中百人に一人の割でした。一九四〇年には百人に九人となりました。数としては決して多いとは云えませんが、着実な増加ぶりを示しています。現代の社会ではデザインに鋭い関心が持たれ、私達の使う品物は次次と適当なデザインをほどこされるようになりました。婦人の進出の機会は今後もますますひらけて行くものと思われます。婦人自身もデザイナーとして素質のある人がたくさんいます。

実験技術者

一九四〇年の実験技術者の数に比すべき数字が、それ以前の国勢調査には出されていないのを見てもこの職種がいかに目ざましい膨脹を遂げたかが分ります。

一九一〇年及び一九二〇年には、この仕事は他の仕事と非常に似通つていたために、それら数種の職種と共に総括して分類されていました。

一九三〇年には八千人の婦人が「技術者及び実験助手」として数られました。一九四〇年にはX光線、電気及び鋼鉄工業の実験助手、酪農場、ラジオ、絹人絹工場、精油工場、化学者助手等も同じ分類の中に含まれるようになりました。新しい準専門的職業の分野が、かなりはつきりした輪かくを持つて来たわけです。これらの技術者や助手の中に婦人は二万三千人いて、全体の三分の一を占めています。実験技術者以外の婦人技術者も千人からいて、全体の一〇分の一を占めています。

化学、分析、冶金の専門家

実験技術者よりも更に専門的で責任の重い仕事は化学、分析、冶金に従事する専門家の仕事です。たして従事する婦人の数も実験技術者より更に少く、一九四〇年に千七百人に過ぎません。けれども婦人が実際問題として科学教育を受けられなかつた一八七〇年には、一名の婦人も国勢調査に報告されていないのから比べれば大した進歩です。一八八〇年には四九名の婦人がこの分野で働いていません。その後はずつと進出を続けましたが。一九三〇年から一九四〇年の間には他の専門的職業と同じくやや減少しています。全体における婦人の割合も百人中五人であつた一九二〇年よりは低下し一九四〇年には百人に三人となりました。百人中二人ちよつとだつた一八八〇年に逆戻りしかけたわけです。

技師

少数ながら技師として身を立てることに成功した婦人が出て来たことは重要な意味を持つています。従来婦人は、この職業が男子の専業であるという観念に挑戦することにあまり興味がなかつたようでした。一九四〇年には二七万八千人の技師中婦人は約千人です。大きな数ではありませんがこれがスタートであるとは云えます。

今後対処すべき問題を前にして、一九四〇年のこの分野における婦人技師を種類別に見るのは興味深いことです。

土木技師	二三一
測量技師	一〇一
電気技師	二二四
機械技師	二二八
工業技師	七四
化学技師	五九
採鉱、冶金技師	七四

建築家

婦人は技師としてよりも、建築家としてずつと早くから進出しています。建築家となるには芸術的な能力と技術的な能力を兼ねそなえていなければなりません。婦人は技術的能力についてはとかく疑問を持たれ勝ちですが、芸術的能力についてはそれ程問題なく認められ、その芸術的能力のおかげで

建築に足を踏み入れることができたのでした。ついで建築は家庭の建造や造庭にも手を伸すようになり、婦人がこの仕事に興味を持ち、それに参加することは当然の権利と考えられました。

一八七〇年にはたつた一人の婦人建築家しかいませんでした。一九四〇年にも五百人とはいませんが、いずれにしても建築家というのはそう数が多くなく、一九四〇年に全体で二万二千人です。婦人の全体中に占める割合は技師の場合と同じく雀の涙程ですが、五〇人に一人よりは幾分よく、その増加率は緩慢ですが着実です。

獣　医

農業においても、他の分野と同様、科学的方法が取入れられるようになりました。そのために獣医の仕事もまた進歩しました。最初は家畜類を飼育し、改良するために獣医の仕事は拡大しましたが、やがて馬、牛、ちば、ろば等が耕作用機械に置きかえられ始めると、獣医の用は減つて、その数も一九二〇年に最高を示した一万三千人からだんだん減つて来ました。この年には婦人の獣医はたつた一名でしたが、全獣医数が一万一千人に減じた一九四〇年には百名の婦人獣医がいて、主に犬猫病院の獣医をしています。

その他の専門的職業に従事する婦人

写　真　師

写真に関する仕事には幾つもの部門があつて、婦人はその中の多数に働いていますし、部門によつては婦人が独占的に働いているところさえあります。けれども専門の写真師としては、男子の第一級の人人に伍する仕事をしている婦人もありますが、全体の数は少数です。

一八七〇年の一三七人に始まつた婦人写真師の数は一九〇〇年迄に急激に増加しました。次いで恐らく第一次大戦の影響と思われますが、一九一〇年と一九二〇年の間に再び急激な増加を見せました。一九三〇年以後は、婦人写真師の増加は男子よりも緩慢になり、その数は一九四〇年にも一九三〇年と殆ど変らず――約五千人――、全体中に占める割合も一八七〇年の百人に二人から、一九三〇年には百人に一五人となりましたが、一九四〇年には百人に一三人と下りました。

職業の中に分類され、「葬儀監督者及び死体防腐師」と呼ばれるようになりました。この仕事にたずさわれる婦人は一八七〇年には二〇人でしたが、一九四〇年には二千人を超し、百人中一人から百人中五人と、ゆつくりではありますが着実な増加を続けています。

飛行家

一九一〇年の国勢調査では、飛行家は興行師の中に分類されていました。これを以て当時飛行家というものが、どういう観念で見られていたかが分るでしょう。けれどもその後航空業が非常な発達を遂げ、飛行家もまた独立した職業となりました。そして航空術、気象学、物理学等の専門知識を必要とするために専門的職業の中に数えられるようになりました。

飛行家として報告された婦人の数はごく少く、一九二〇年に八人、一九三〇年に六六人、一九四〇年に五一人で、全飛行家中百人に一人を超したことは一度もありません。けれどもこの数は有給パイロットとして航空業に従事する婦人の数であつて、パイロットの免許状を持つている婦人の数はもつとずつと多いはずです。

第六章　事業を営む婦人

ここで扱うのは、事業を所有する婦人、その事業を経営する婦人、及び他人の事業を経営し、又は経営上責任ある役割を演じている婦人です。その中には一産業の業主もありますし、自分で出した婦人帽子店に自分一人で働いているような人もあります。一産業の業主格の人はそう多くはありませんし、他人の事業を経営する上において高い地位を占め、或は大きな責任を負つている人でさえ少数です。けれどもこの少数の人人とそこの界の先鋒としての重要な役割を果している人人です。

婦人は実際に一八七〇年以前から事業を行つていました。しかも植民地時代の新聞の広告欄を見ても分る通り、非常に種種様様の業務に乗出していたのです。商人、店主の妻は夫のパートナーとして働き、夫の死後は製皮、印刷、洋服裁縫、塗装、造船、銀細工、銃器鍛造のような事業も受けついで経営しました。自ら帽子屋、呉服屋、菓子屋、居酒屋、宿屋等を開いた婦人もありました。又晒布工場、精穀工場、酒造工場を経営した婦人のあつたことも知られています。一八七〇年には、一九四〇年と比較できるような業種に八千人の婦人がおりましたが、七〇年の間にその数は四〇倍に増加し、

一九四〇年には三一万九千人を数えています。

七年間を通じて、婦人事業家の大部分は商業に従事していました。尤も全婦人事業家中商業に従事する婦人の割合は一〇分の七から一〇分の六に下りはしましたが……。一八七〇年にこれに次ぐ二つの大きなグループは食堂及びカフェー経営とホテル経営です。最初は前者が優位、次には後者が優位という経路を経て、一九四〇年には前者が全婦人事業家の一〇分の二、後者が一〇分の一となっています。その他婦人郵便局長や、鉱山、建築、製造工業、運輸、通信等の業務を経営している婦人も、少数ではありますが、長い年月の間にその数も比率も増加して来ています。一八七〇年以後に始まり、一九四〇年にはそのために婦人事業家の数を相当に高めている新業種についても次の各項で述べることにいたします。

食料品店経営者

食料品や酪農品の店を経営する婦人の数は、一八七〇年から一九四〇年迄の間に五〇倍、即ち一千四百から六万九千に増加しています。チェイン、ストア制が非常な発達を遂げたにも拘らず、これらの婦人の増加は少しも止らず、全小売業者中――男女合計――百人に一人から百人に一〇人となりました。

食堂、喫茶店経営者

突然生活費を稼ぐ必要に迫られ、しかも家事のきりもり以外に何の技能も持たない多くの婦人は下宿屋を始めました。（これらの婦人については既に「下宿、貸間業者」の項でお話しました。）しかし中にはもう少し研究して食堂や喫茶店を開いた婦人もありました。

一八七〇年迄に約七五〇人の婦人が食堂、喫茶店等の飲食店を始めました。これはこの種の経営者中約百分の一にしか当りません。一九〇〇年にはその数は約七千人になりましたが、この項から外食の習慣が非常に一般化し、食堂の経営を成立させる腕のある婦人には絶好の機会が訪れました。一九四〇年には六万六千の婦人業者がいて、全業者の四分の一近くも占めています。

専門店経営者

一八七〇年には三千五百人――当時にしては相当の数の婦人が専門店を経営していました。煙草、洋裁縫ミシン、陶磁器や石器、農具、書籍と文房具、鉄錫銅の器物、新聞や定期刊行物、金銀宝石細

工、楽器等がその主なものでした。

一八七〇年から一八九〇年の間に婦人はこれらのものの商取引に急速な勢で進出しました。その後の二〇年間には大した変化はなく、次の二〇年間に再び四千人許りの婦人が商売を始めています。次の一〇年間には一万二千人、次の一〇年間には二万四千人がふえ、一九四〇年には合計五万七千人の婦人がこの種の商業を営んでいます。新しい型の商売も勃興して、いくら均一の品物を売る百貨店や、自動車及び附属品販売店や自動車の給油店を経営する婦人も出て来ました。そして一八七〇年には全専門店経営者中五〇人に一人であつた婦人は、一九四〇年には五〇人に三人となりました。

雑貨、洋品、靴、帽子店経営者

この種の品物を商う婦人の歴史は、今お話した専門店を経営する婦人の歴史とは幾分違つています。一八七〇年に八六四人であつたこれらの婦人は、一八九〇年には六万二千となり、この種の業者中三分の二近くを占めました。それから二〇年の間にその数は更に倍加しましたが、全体の割合から見ると次第に男子に地歩を譲り、二〇年のおわり頃には全業者の五分の二になつています。その後婦人業者は減退の一路を辿り、一九四〇年には数にして五万五千、割合にして四分の一と下りました。

このように婦人業者が衰退した理由の一つは、昔は婦人業者が自らつくる手製の品物が売れていたのが、だんだん顧客が手製品に興味を持たなくなつたことだと考えられています。

鉱工業経営者

このグループには小さなパン焼工場の主も、死んだ夫の製作所を受けついだ妻も、大石炭会社の女社長も、大新聞の経営者も含まれています。従つてここに含まれる人人は、その仕事の大きさも、収入の高も非常にまちまちです。

この分野に入る業種としては、鉱業、建設業、製造業、自動車の保管、貸附、修繕業、鉄道経営及び鉄道修繕業、市内電車やバスの経営、タクシー業、トラック業、その他の運輸通信業を挙げることができます。一九四〇年にはこの分野に含まれる婦人の中、一〇分の七迄は製造業を経営する人人です。

一八七〇年には三百人足らずであつたこの界の婦人は、一九四〇年には二万七千人となり、全事業経営者中に占める比率は二百人に一人から、二百人に七人となりました。婦人の進出の機会は未だに限界があるとはいうものの、どんどんと拡大しています。日日の新聞には責任ある地位につき、多額

の収入を得ている婦人のことがのつています。

ホテル経営者

第四章のサービス業に従事する婦人のところで、下宿や貸間をして、勤労者に安い宿所を提供するとともに、自分自身も生活の道を立てている婦人についてお話しましたが、中にはもつと勇敢にホテルや旅館の経営に乗出した婦人もあります。このような婦人は一八七〇年には約千人いました。全ホテル業者の三三分の一に当ります。一九一〇年頃迄その数は極めて急速な増加率を示し、その後はやゆつくりになつていますが、ともかく一九四〇年には二万二千の婦人ホテル業者がいて、全体の三分の一を占めています。

官公吏、監督官

近年政府が行うようになつた諸事業、例えば工場監督とか保健事業のような仕事に、婦人は特に関心を持ち、又その資格も備えているようです。参政権を与えられてから、婦人は市民活動や政治活動に大きな役割を演ずるようになり、そのために一般の官公職に任用される機会も次第に多くなりました。そして官公職に任用される機会がふえるに従い、監督的な仕事に必要な背景や経験を身につけようと努める婦人もふえました。

その結果、一九一〇年には連邦政府、州政府、地方政府を合せて約三千五百人の婦人官公吏及び監督官がいましたが、一九四〇年には更に千五百人がふえていました。全官公吏監督官中に占める比率も百人に四人から、百人に九人となりました。

郵便局長

一七七七年に連合規約の草案が採択されてから、郵便業は連邦政府の仕事となりました。そして婦人の郵便局長がすぐその年に登場しました。一八七〇年には二五〇人の婦人郵便局長がいて、全郵便局長中百人に三人の割を占めていました。その後その数も比率もどんどんふえ、一九四〇年には一万七千の婦人郵便局長がいて、百人中四人の割になつています。

薬屋、薬剤師

植民地時代の婦人で、膏薬、軟膏、せんじ薬、その他の家庭療法を母親から伝授されない人は恐らく一人もなかつたでしよう。婦人のための家事の手引書にもそういうものの処方が配されていました。薬品の種類や基準を列記したナショナル・ファーマコピア（調剤書）が現われて、薬品製造者や、家庭婦人から薬や手当てに関する仕事を奪つた薬剤師の指針となつたのは一八二〇年のことでした。けれどもその後も、ごく最近に至るまで、家庭婦人のおとくいの強壮剤やせんじ薬や膏薬はアメリカの至る所で使われていました。

あなたの御両親はどうか分りませんが、おじいさんやおばあさんなら「スプリング・トニック」という強壮剤や、硫黄と糖密の膏薬や、いちじくとせんなの葉の下剤を覚えていらつしやると思います。土地によつては、今でもそういう家庭療法を盛に用いている所があります。

一八七〇年迄には、内服薬の調合や、その他の医薬品の製造は（少数の婦人が今でも家庭がつくるものを除いて）すつかり男子の手に移りました。薬屋及び薬剤師中、婦人はたつた三三人で、全体から見たらほんとうに僅かなものでした。

年と共に薬品の水準はどんどん向上し、新種の薬品も売出されるようになりました。薬品の調剤や製造は非常に科学的、且複雑なものになり、薬剤師になるには薬学の専門教育を受けなければならなくなりました。そこで今では薬剤師は専門的職業に、単に薬屋を持つている人、或は薬屋を経営している人は薬屋として事業家の中に数えられております。

昔は薬屋はそのまま薬剤師も兼ねていました。又これまでの国勢調査でも薬屋と薬剤師は同じグループの中に数えられていましたから、昔と数を比べることができるわけです。

婦人の薬屋又は薬剤師は、少数ながら着実な増加を続けています。一九四〇年にはその数は約六千人で、全薬屋薬剤師中五〇人に三人の割です。この六千人の中五分の三は専門家の薬剤師であり、五分の二が薬屋として薬品の取引に当る人です。

銀行、金融業者

第一次大戦前には、銀行や金融業における婦人の仕事は殆ど機械的な事務ときまつていましたが、戦争中に婦人は男子に代つて、もつと熟練と技能を要する仕事に進出しました。一九一〇年から一九二〇年の間に、銀行、金融関係に婦人の業主、管理者、役員、外交員が急激に増加し、二千三百人から五千人になつたのはそのせいです。

一九二〇年から一九三〇年の間にもその数はふえましたが、次いでやつて来た不景気のおかげで、銀行、金融業者は特にひどい打撃を受け、婦人業者の数も一九三〇年の九千人から、一九四〇年には

七千人に減少しました。

一九一〇年から一九四〇年迄の三〇年間に、婦人は男子よりもやや増加率が高く、全銀行、金融業者中百人に三人であつたのが、百人に五人となりました。

団体の役員

既に一八五〇年代から婦人団体はアメリカ人の生活に次第に重要なものとなつて来ました。婦人団体の中には、家庭内の日日の仕事だけに留らず、外にも仲間で行こうとする婦人がつくつたクラブもありましたし、次第に婦人が家庭の外で雇用労働者として働くようになると、同じように仕事のほかに活動を求める婦人が集つてつくつた団体もできました。これらの婦人団体、労働組合、その他社交や市民活動や、博愛的な目的のためにつくられた団体の中で、婦人は小さいながらもだんだんと役員、会長、代表になる機会を持つことができました。

団体の仕事を職業としている婦人は一九二〇年にに二千人でしたが、一九四〇年は四千人を超しました。けれども団体役員全体中にも占める割合は四分の一から五分の一以下に下つています。

保険業者

保険の外交員については「ホワイト・カラー・ワーカー」の項で既にお話しました。ここでは保険会社の社長とか支配人とか重役とかをしている婦人についてお話するのです。これらの婦人の進出の型は、婦人保険外交員のそれと大変よく似ています。一九一〇年には僅か一四〇人しかいませんでしたが、一九三〇年迄に急激に増加し、それ以後は増加率が大分ゆるんでいます。けれども実数はゆるやかながらも増加を続け、一九四〇年には三千人を数えました。

男子との比率について云えば、婦人保険業者の方が婦人保険外交員よりも幾分いい成績をおさめています。一九四〇年迄に保険業者中の婦人は百人に一人から百人に七人になりましたが、外交員婦人の方は百人に五人となつただけです。大勢の婦人が保険業に入るにつれて、責任ある地位につく婦人の数も次第にふえました。婦人の働くことが別に事新しくもない事務その他の部面でも、経験によつて要職に上る婦人も出て来ました。

第七章　農業に従事する婦人

アメリカに起つた最も大きな動きの一つは、農村の人口が都市へ流れ込み、農業従業者が工業従業者に変化したことです。一八七〇年には農業従業者が国中の就業者の半ば以上を占めていました。その後一九二〇年に至るまで、農業従業者の数は増加しましたが、工業従業者の増加率には及びもつきませんでした。一九一〇年以後は農業従業者の数は次第に減少し、一九四〇年の農業従業者九百万という数は、全就業者数の六分の一そこそこに過ぎません。

近年大農の数はふえつつありますが、アメリカの農業はまだまだ家族の手でまかなえる程度の農地を持つ農家（自作農、小作農を含む）に頼つています。一九四〇年には、大まかに云つて農業従業者の八分の五が農業経営者又は農場監督者であり、八分の一が無給の家族労働者であつて、農業賃金労働者は八分の二に過ぎません。このことは大部分の農場が雇用労働者の手を借りずに経営されていることを物語つています。

官庁統計によると、この中に占める婦人の地歩は小さなものです。一九四〇年の国勢調査では、婦人の農業従業者数は五〇万ちよつとに過ぎません。農場経営と不可分の関係を持つ農家の家事労働にたずさわる婦人が、ここでは全く除外されているからです。調査に現われた女子農業従業者中、一〇人に五人が無給の家族労働者であり、三人が農場経営者、二人が賃金労働者です。

開拓期の農家は自給自足を行つていました。労働はすべて手によつて行われ、生活に必要な物は殆どすべて自分の家で生産されましたから、外の世界に何も求める必要がありませんでした。お金で雇つたり、雇われたりする事は今よりずつと少く、従つて妻や、無給の家族労働者の女子の役割は今よりずつと重要性をもつていました。植民地時代から南北戦争の頃まで、これらの婦人は大部分、家事のほかに搾乳とか家禽の世話、菜園や果樹園の手入れに当つていました。一部の婦人は農場の所有主又は小さな農場経営者として自営の生活を立てていました。又他人の農場に雇われて搾乳や家禽の世話に従事していた婦人もありました。これらの婦人は皆、きこりとか乳しぼりとか、かなりの荒仕事をしていましたが、田畑に出て「野良仕事」をさせられることはめつたにありませんでした。

南北戦争の直後から、開拓民への土地移譲が行われるようになり、農業は活気を呈しました。手による労働は馬力を使う耕作に道を譲り、農業の性格が変り始めました。婦人の農業従業者も急速に増加し、第一次大戦の頃には百万を超す程になりました。しかし戦後は減少の一途を辿り、一九四〇年には約五〇万になりました。五〇万という数は一八七〇年当時とあまり変らない数です。

婦人の自作農、小作農、農場管理者、農場監督者の数は一八七〇年の二万五千から、一九〇〇年の三一万二千人迄増加しましたが、一九四〇年には再び一五万四千と下りました。婦人の農業雇用労働者及び家族労働者は一八七〇年の四三万に始まり一九一〇年の八〇万五千迄上つて、再び三六万七千——一八七〇年よりも更に少い——に下落しました。

農業経営者、農場管理者、農場監督者については、右の数字はかなり正確なものと云えますが、農業労働者の数はどく大ざつぱなものでしかありません。農業労働者の数に関して問題なのは、国勢調査が年によつて、一年の異る時期に行われていることです。（一八七〇年、一八八〇年、一八九〇年、一九〇〇年は六月に、一九一〇年は四月に、一九二〇年は一月に、一九三〇年は四月に、一九四〇年は三月に行われています。）しかるに農業は季節的な仕事で、種蒔きや穫入の時期が一番忙しい時期です。農業経営者は一年を通じて農場に住み、常に何等かの農場の仕事をしていますから、どの時期に国勢調査が行われても、自分を農業経営者として報告するでしょう。けれども雇用者の方は農繁期にだけ雇われる者がありますし、無給の家族労働者である婦人は、あまり戸外労働をしない農閑期には、自分を単なる主婦として報告しがちですから、種蒔きか穫入れの時期でなければ、雇用労働者、家族労働者の正確な数は掴み難いわけです。しかしたとえ国勢調査を各年同じ月に行うようにしたとしても、お天気によつて種蒔きや穫入れが早くなつたり遅くなつたりすれば、数が狂うことは免れません。

農家には主婦の無給の労働があるおかげで、家族が一定の生活をするために、都市の家庭ほど実際の現金収入に頼り切らずにすみます。勿論主婦の労働は農家の現金収入も助けていますが、それ以上に大きいのは、彼女の自家用菜園や、鶏、あひる、鶏鳥や、彼女のつくるかんずめ、漬物の類が、家族の健康や福祉を増進させていることです。その他にも農家の主婦は、都市の家庭がお金を払つて購うさまざまのもの—衣料品の製作や手入れ、石けん、家具油、化粧水、寝具、羽ぶとん等の製造を自分の手で行つています。

農家の主婦はこのように家事労働を負つているため、普通は田畑に出てお金になる作物の耕作はしていません。例えばテキサス州の綿花栽培地を調べて見たところ、綿畠に出て働いているのは大部分未婚の婦人でした。主婦であつて耕作をする婦人、主婦以外の女子家族労働者及び家族以外の女子雇用労働者の数を見ますと、少くとも一八七〇年以後は、全家族並びに雇用労働者中婦人の占める比率は決して大きくなく、一八七〇年に八分の一、一九二〇年に五分の一、一九四〇年には一〇分の一となつています。一九二〇年に最高率を示しているのは、恐らく第一次大戦中農場から男手が連れ去られ、しかも農作物は非常に要求されたため、婦人が田畑に出て行つたからでありましょう。

農業経営者、農場管理者、農場監督者中婦人の占める割合は更に小さく、一八七〇年には百人に一

人足らず、一九〇〇年には百人に五人、一九四〇年には百人に三人となつています。

第八章　職　人

この中には「事業を営む婦人」のところで述べたような取引を業とする婦人は含まれません。ここで扱うのは職人とか、工場の職長、監督のような人人です。この人人の消息は一八七〇年以来欠かさずに揃つてはいませんので、一九四〇年の一二万二千人に達する迄にどんな曲折があつたかは明かでありません。

ただ一つはつきりしていることがあります。それは職人になるには長い年期を入れて技術を磨かなければならないため、体力を要する仕事が多いため、又組合が規約によつて新しく職に加わる人を制限しているために、一九四〇年に至る迄の七〇年間、この分野は婦人に広い門戸を開いていなかつたということです。

各個の職種について、国勢調査に報告された少数の婦人の数字にさえ多少の疑問が持たれます。例えば鍛冶屋として報告されている婦人は、夫の遺した鍛冶店の所有者に過ぎないかも知れませんし、機械師として報告されている婦人も、ほんとうは単なる機械操作工に過ぎないかも知れません。更に一

九三〇年から一九四〇年の間に幾分人数が増加しているのは、真の増加でなく、両年に行われた調査での勘定や認定の方法が異つていたせいかも知れません。

職長、監督

職長、監督の仕事は、その型も責任の程度も非常にまちまちです。職長、監督の数は、他の職人に比べて、かなり正確に捉えることができます。婦人の職長、監督の数は一九二〇年には二万三千人でしたが、一九二〇年には増え、一九三〇年には減り、一九四〇年には再び増えて三万八千人になつています。全職長、監督中に婦人の占める割合は、この三〇年間に殆ど変化なく、一〇人に一人を幾分下回る程度です。

一九四〇年の全婦人職長、監督中、四分の一を除く外のすべては製造工業に従事する人人であり、更に製造工業中の半分以上が雑製品及び被服製造業に働く人人です。一〇分の一ちよつとが食品工業に、一〇分の一足らずが金属工業に、そしてその他の製造工業に働く人は一〇分の一よりずつと少くなつています。

装飾師

一九〇〇年以降の数字を見ると、室内装飾やウインド飾附けの仕事は、小さくはありますが拡大しつつある婦人の職場であることが分ります。家庭の装飾、再装飾に常にいきいきとした興味を失わないホームメーカー達は、装飾師やデパートの装飾部に相談を持ちかけます。その上雑誌という雑誌がいやが上にもそういう熱を煽り立てます。商店はより美しく効果的な陳列窓をめざして、互いにしのぎを削ります。（有名な美術家のダリーに、ほんものの外国風の飾附けを頼んだ店さえあります。）婦人が一定の地位につくためには、通常装飾学校で商業美術を修めることが要求されますが、ともかくこの種の仕事は婦人の進出がどく「自然」とみなされるものの一つです。

かくて、一九〇〇年の三百人、全装飾師の一〇分の一足らずから、婦人は一九三〇年には六千五百、全体の四分の一以上にふえました。大いで不景気がやつて来て、婦人装飾師は数にしては三百人許り増加しましたが、全体中の割合は五分の一ちよつとに下りました。

塗装師

婦人の塗装師は一八七〇年の九六人に始まり、一九四〇年には一万人を超しました。全塗装師中に占める割合も千人に一人から、千人に二〇人と上昇しました。決して大きな数ではありませんが、漸時増大しつつあり、婦人に新しい進出の場を約束している職種といえましょう。一九四〇年には婦人塗装工の三分の一が新造のビルの塗装や、古いビルの塗りかえに従事し、三分の二が工場や製作所で、主に吹付け塗装に従事しています。後者は工場や製作所の全塗装師中、百人に七人の割合です。

表具師

表具師などという商売が案外婦人に好まれる職業だということは、誰でもちょっと思い当らないことでしょう。けれども婦人の占める比率は、塗装師より表具師の方が高く、一八七〇年には百人に一人、一九四〇年には百人に六人と増加しています。尤も表具師全体の数は塗装師の数に遥かに及ばず、従つて婦人表具師の数も、一九四〇年に千七百という小さなものです。

家具縫装師

家具の縫装は婦人の家庭における仕事と密接な関連のある仕事です。そして同時に、独立戦争以前から婦人が従事していた歴史的な職業でもあります。けれども一八七〇年には婦人の家具縫装師は僅か一四〇人しかいませんでした。それからは着実な増加をつづけ、一九四〇年には二千人を超しています。男子との比率を見ると、一八七〇年には全縫装師中婦人は百人に三人、一九二〇年には百人に七人、一九四〇年には百人に五人と上り下りを見せています。

第九章　保安サービスに従事する婦人

長い歴史を通じて、婦人の役割は炉辺と家庭を管理すること、男子の役割は、炉辺と家庭及び自分の属する共同社会を守り、そのために戦うこととされていました。このような歴史的役割が、いかに男子と女子の職業に大きな影響を与えているかは、保安サービス従事者に男子の数が圧倒的に多いのを見れば分ります。

一九四〇年迄のところでは、国勢調査に婦人の消防夫、陸海軍兵士、海岸監視員等は一人もおりません。婦人が軍隊に入れるようになったのは第二次大戦が始まってからでした。

その他の保安サービスにおける婦人の役割は、犯罪防止に対する社会の認識が深まるにつれて増大し、店頭監視官や看守など、警察の婦人部の仕事もどんどんふえました。保安サービスに働く婦人の数は一八七〇年の二〇人から、一九四〇年には四千人以上に増加しましたが、それでも全体における婦人の割合は百人に一人程度です。

第十章　あとがき

総括して申しますと、一九年四〇年には、満一四才以上の婦人人口の約四分の一――一、一五〇万人が就業者として働いています。その内訳はざっと次の通りです。

事務従事者	三、四四〇、〇〇〇人
工業労働者	一、九七〇、〇〇〇
サービス業従業者	三、七二三、〇〇〇
公的、私的家事従業者	三、八三二、〇〇〇
その他のサービス従業者	八九一、〇〇〇
専門的職業	一、四九三、〇〇〇
管理者	三一九、〇〇〇
農業従事者	五二二、〇〇〇
職人	一二二、〇〇〇

保安サービス従業者　四、〇〇〇

別の云い方をしてみましょう。百人の婦人就業者を取り、その内訳を見ますと、

事務従事者が三〇人

工業労働者が一七人

サービス業従事者が三二人（公的私的家事従業者が二四人、その他のサービス従業者が八人）

専門的職業従事者が一三人

営業者が三人

農業従事者が四人（半分が家族労働者）

職人が一人

という状態で、保安サービスには百人中一人以下です。」

海外婦人労働資料　No. 32

昭和26年11月10日 印刷
昭和26年11月15日 発行

東京都千代田区大手町1丁目7番地
編集兼発行人　労働省婦人少年局

東京都新宿区花園町64番地
印刷所　信陽堂印刷株式会社